

②変容の特性

これらの指標を用いて、住まい方の変容の特性を検討する（図3-2-1～3-2-2）。

1) 「分離」

住まい方の変容のうちで最も顕著なものが分離で、建替による部屋数の増加を基本的な要因として、調査対象23事例のうち22例(95.7%)で出現している。

具体的な内容についてみると、従前は食寝一致や団らん・就寝一致がそれぞれ43.5%(10/23)、52.2%(12/23)と約半数前後を占めていたのに対して、建替後は、8.7%(2/23)、13.0%(3/23)に減少し、食事・だんらんの場と特に夫婦就寝の場が分離される食寝分離の傾向が顕著である。

また、床座による団らんの指向性の強さから特に狭小な0団地のDKは基本的にだんらんの場になりにくい傾向があり、食事の場とだんらんの場の分離や分散も見られる〈St・Md等〉〈Ii・Tg等〉。従前は、食事とだんらんの場が一致していたのが21事例(91.3%)を占めていたのに対し、建替後は、7事例で両者が分離され、4事例で食事やだんらんの場の分散が見られる。全体の47.8%(11/23)で、食事と団らんの場が一致していない。居室にゆとりがある場合には、床座と椅子座、朝と夜や季節によって食事の場を選択できることは生活の質を高める上では有効であるものの、その動機はDKの床座に対する抵抗感にあり、空間と生活の拮抗した関係が窺われる。

就寝形態における分離もみられ、N団地の4例を中心に従前の親子一室就寝のうち約半数(5/9)が分離就寝に変化している。またN団地で従前に2事例見られた夫婦別寝は解消されたものの、0団地では建替後、高齢者を中心に新たに5事例が発生している。

こうした使われ方の分離や分散は、居室の機能を分化し安定的な私的空間を確保する上では有効である反面、子供部屋・就寝室の閉鎖化や団らんと食事の場所の分離の問題も新たに生じている。特に居室毎の独立性の強い0・R団地では、「隔絶的な分離」の傾向が顕著である。これに対して、N団地では、就寝分離や食寝分離が行われているものの、昼間は就寝室や子供室と茶の間が一体的に使われるなど〈就寝室+茶の間：Kt・Tt〉〈子供室+茶の間：Md・Tb〉、寧ろ場の連続性を重視した「分節化」が窺われる。

分離におけるいま一つの特徴は、N団地に見られるように住戸の個別設計によって、従前実現しえなかった住み手の特定の価値観（思い入れ）を分離、拡張させつつ、それを専用の空間化した「個性に特化した居室」（Mr：稽古場、Tt：専門的な趣味活動の場としての書斎、Ii：床の間・仏間付きの座敷、Md：子供のコモンスペース、Tb：仕事用物置）を確立していることである。そこには、従前の生活における「問題の改善」と「実現したい生活価値」とが、分離によって同時に実現されている。

熊本県営常山第二団地

建替前	建替後	分離	継承	重合	付加	新生	消失
Sm邸 3 (M&F+C) 	3 (M&F+C) 	1 就寝	1 食団客	1 寝勉+客	1		1 店舗
Nt邸 2 (M&F) 	2 (M&F) 	1 客・寝	1 物置	1 食団+客	1		
Ii邸 2 (M&F) 	3 (M, F&Cm) 	1 食/食団	1 就寝		1 接客	1 m 就寝	1 物置
St邸 2 (M, F, f1&f2) 	4 (M, F, f&Gf) 	1 M食団/F就寝		1 寝+客	2 寝-GfGf寝勉	2 C 勉強	
Md邸 4 (M, F, f1&f2) 	4 (M, F, f1&f2) 	3 食団就寝		2 団+勉+寝			
Ymt邸 2 (M&F) 	2 (M&F) 	2 食寝就寝		2 Mの空間+客		1 物置	

<凡例> 1) 生活行為 2) 居住者属性 3) 住戸生活空間の構成

1) 就寝 K: 台所 食: 食事 団: だんらん(くつろぐ) 客: 接客 (仕: 仕事 (家事仕事も含む) 勉: 勉強
2) M: 男性 F: 女性 m: 子供(男) f: 子供(女) Gm: 孫(男) Gf: 孫(女)
3) ③: 生活の中心 (家族の中心) ②: 一体的に空間が使われている ①: 増築された空間 ■: 仕切りがある

熊本県営常山第二団地

建替前	建替後	分離	継承	重合	付加	新生	消失
Ad邸 2 (M&F) 	2 (M&F) 	1 食/団客	1 接客の分散	1 客+寝			
Mg邸 2 (M&F) 	2 (M&F) 	1 就寝					1 C 勉強・就寝
Tg邸 2 (M&F) 	4 (M, F, m&f) 	1 寝団/食団客				1 m, f 同居	2 物置き部屋
Mn邸 2 (F&f) 	1 (f) 	1 食/客/客団寝		1 接客の分散	1 物置		1 F 死去
Wt邸 4 (M, F, m1&m2) 	2 (M&F) (M) 	1 就寝の分離					2 m1 m2 別居

図3-2-1 建替前後の平面と生活の対応の変化

ロ) 継承

従前の一室の使われ方がそのまま継承されている事例は、全体の47.8%(11/23)を占めるものの、従前の増築による物置スペースを建替後に発生した余剰室で継承(4/23)することや、子供部屋(3/23)、食事・団らん・接客の場(3/23)などである。この場合の継承は、従前の生活価値を住み手が積極的に保持するというよりも、寧ろ居室が余剰した結果や、あるいは従前の子供部屋や茶の間などをそのまま慣習的に継続するなどで、積極的な意味は見いだしにくい。一方、N団地では、従前の娘二人の共同勉強スペースが子供のコモンスペースとして〈Md〉、あるいは団地管理人の住戸で来客の多さに対応した従前の玄関に面する接客スペース〈Im〉がそのまま継承されるなど、従前の生活価値を持続するような能動的な住まい方が見られる。

ハ) 重合

従前住戸において分離していた行為が重合される事例は全体の47.8%(11/23)を占めている。O団地での重合の典型は、従前食事・団らん等に重なり合っていた接客や仕事が、そこから分離ないしは、分散化して就寝室に重合する例で、重合パターンの4/6を占める〈Ad・St等〉。その背景には、居室の面積の増加と、食事・団らんの場が洋間であるために改まった客のもてなしには就寝室になっていても和室を使用したいという格式性の希求による。R団地では、一人暮らしへの変化によって生活の場を一室に完結させたいという欲求から重合化が図られ、従前の食寝分離が建替後には食寝一致に転換している事例も見られる〈Is〉。

一方、N団地では、核家族の場合に、従前の母親と子供の一室就寝による夫婦別寝が一室就寝に転換し、併せて子供の勉強と就寝場所が分離していたのが子供部屋の確保によってまとまるものが2事例ある〈Tb・It〉（後者のみO団地に1事例）。また、住み手から計画段階で最も強く要望された茶道・華道の専用の稽古場が続き間で確保されたことで従前は分離していた食事・団らんと就寝が重合する事例〈Mr〉が見られる。

ニ) 付加

従前は、「住宅が狭くて、とても客を呼べる状態ではなかった」のに対して、居室数や面積が拡大したことによって、新たに接客の場が団らんの場や就寝室に付加される事例や〈R団地：Is・Hd〉、家族構成の変化によって生じた新たな生活行為（例えば、子供の勉強が、他の用途と兼用して一室に付加される事例〈O団地：St〉）が見られる。一方N団地では、「ワンルーム」のように広々とした居間を保持するために、子供の一時的な就寝の場を居間に重ね合わせる事例〈Im〉が見られる。

熊本県當西片団地

建替前	建替後	分離	継承	重合	付加	新生	消失
<p>Tt 邸4 (M, F, m&f)</p> <p>(F) (m) (f) (M)</p> <p>(食) (客) (仕) (団)</p>	<p>4 (M, F, m&f)</p> <p>(M) (F) (m) (f)</p> <p>(食) (客) (仕) (団)</p>	2		2			
<p>Mr 邸2 (F&m)</p> <p>(F) (m)</p> <p>(食) (客) (仕) (団)</p>	<p>2 (F&m)</p> <p>(F) (m)</p> <p>(食) (客) (仕) (団)</p>	1		2			

熊本市営竜蛇平団地	建替前	建替後	分離	継承	重合	付加	新生	消失
Th邸 2 (M&F)			1 団／寝	1 物置	1 食＋団＋客	1 仕事	1 空き部屋	1 F 死去
Is邸 2 (M&F)			1 食／団	1 物置	1 食＋団＋寝	1 接客		1 M 死去
Hd邸 3 (M, F&m)			1 就寝	1 就寝(m)	1 接客	1 接客		1 物置

1) ①: 就寝 K: 台所 ②: 食事 ③: だんらん(くつろぐ) ④: 接客 ⑤: 仕事 (家事仕事も含む) ⑥: 勉強

3) ⑦: 生活の中心 (家族の中心) ⑧: 一体的に空間が使われている ⑨: 増築された空間 ■: 仕切りがあり繋がる

図3-2-2 建替前後の平面と生活の対応の変化

ホ) 消失

消失の典型は建て替え前後での家族構成の変化によるもので、特に子供の転出や配偶者の死去による消失が5例を占めている。また、O・R団地で従前は増築によって確保されていた物置が建替後には計画されなかったために、消失したのが4事例見られる。前者は、社会的要因として不可避なものであるが、後者は計画的要因による問題と言えよう。

ハ) 新生

子供の同居や結婚など家族構成の変化を要因とする以外は、O・R団地の場合には主に建て替え後発生した余剰室を物置にしたり、空室にしておくことによって生まれている。即ち、本来不要な部屋を空き部屋にするよりも物置化した方が部屋が片付くといった消極的な理由による。

O・R団地は、従前重複していた生活行為を居室の増加に合わせて単に分離・分散する「単純分離」が顕著である。特に、公私室型の住戸計画に規定されて、食事・団らんの場と就寝室・子供室を分離する「公私分離」の住まい方に画一的に偏する傾向が顕著である。重合も居室の床仕上げに誘導された接客の分散化によるものが多い。即ち、環境移行に対して従前の生活の組立方を一旦白紙に還元した上で、空間に生活を受動的に順応させつつ再構成し、従前に不都合だった最低限の問題を改善することを主眼に置いた生活の組み直しが行われている。その結果、従前の生活との分断・不連続が生じている。

N団地でも、基本的には生活行為の「単純分離」が中心であるが、分離されるのは個室や就寝室だけでなく、例えば、《稽古場》《書斎》《子供のコモンスペース》《座敷》など生活を個性化するような価値の投影された場も含まれている。と同時に、従前の生活行為相互の連続性や位置関係が建替後も保持されているのが特徴である〈Un〉〈Tb〉。問題の改善に加えて、従前の生活価値を継承・発展することが重視され、その結果、生活が連続的・漸次的に変容し、緩やかな環境移行が実現されている。

V-3-2. 住まい方と住意識からみた環境移行の特性と評価

従前の住まい方や住意識、住み手の評価と現在のそれとを比較することで、建替を契機にして、①従前の住まい方における問題の改善、②問題の持続、③生活価値の継承・発展・退行などの変容の状況、④新たな環境による新たな生活価値や問題の現出、などについて明らかにする。N団地とO・R団地とを比較し、建替にともなう環境移行の評価を行い、あわせて創発的方法の有効性について考察する。

その場合、①の問題の改善も広い意味では、新たな環境によって、（従前の問題が改善

されて) 新たな生活価値を生み出すという点では④に含まれるが、ここでは、④を新たな環境によって従前には意識されなかったあるいは、従前の価値とは無関係な新たな生活価値の触発や問題の現出として、①と④を区別している。図3-3-1～3-3-8は、N団地における従前と現在の住まい方と住み手の住意識や住まい方に対する評価の変容を表したものである。

(1) 従前の問題の改善

従前の住まい方に対して住み手が問題にしていたのは、一つには「従前の6畳は、食堂兼居間兼応接室兼寝室で落ち着かなかった」や「親の就寝、子供の勉強の場になっていた(1-203)」など、住戸の狭小性や部屋数の少なさに起因した生活行為の過剰な重複によって、安定した夫婦室や落ち着きのある場が確保できないことに対する強い不満が特に家族人数の多い核家族を中心に見られたことである。これに対して、特にO・R団地では、部屋数と面積の増加によって生活行為が分離され、単身者や夫婦のみの世帯では、「自分の部屋ができて落ち着く(0-1-203)」や「自分の場所と接客の場をきちっと分けられるようになったのはよい(0-5-101)」など、専用の就寝室や接客の場が独立して確保できたことが評価されている(図3-4)。また核家族では、「娘も以前から欲しいといっていたので個室ができて喜んだ(0-1-203)」や「夫婦の部屋を期待していなかったが、三部屋あるのでとれた。自分専用の部屋が出来て落ち着く(0-1-203)」など家族がそれぞれ個室を確保できたことが評価されている(図3-5)。いずれの場合にも特定の人・生活行為に帰属する「専用空間」が生み出されることによって、生活に「落ち着き」や「安定性」がもたらされている。

さらにそうした生活行為の分離が進み「北和室は夏涼しいので違うTVを籐の椅子に座って見る」といった、季節や状況に応じた居場所の選択・分離につながっている。

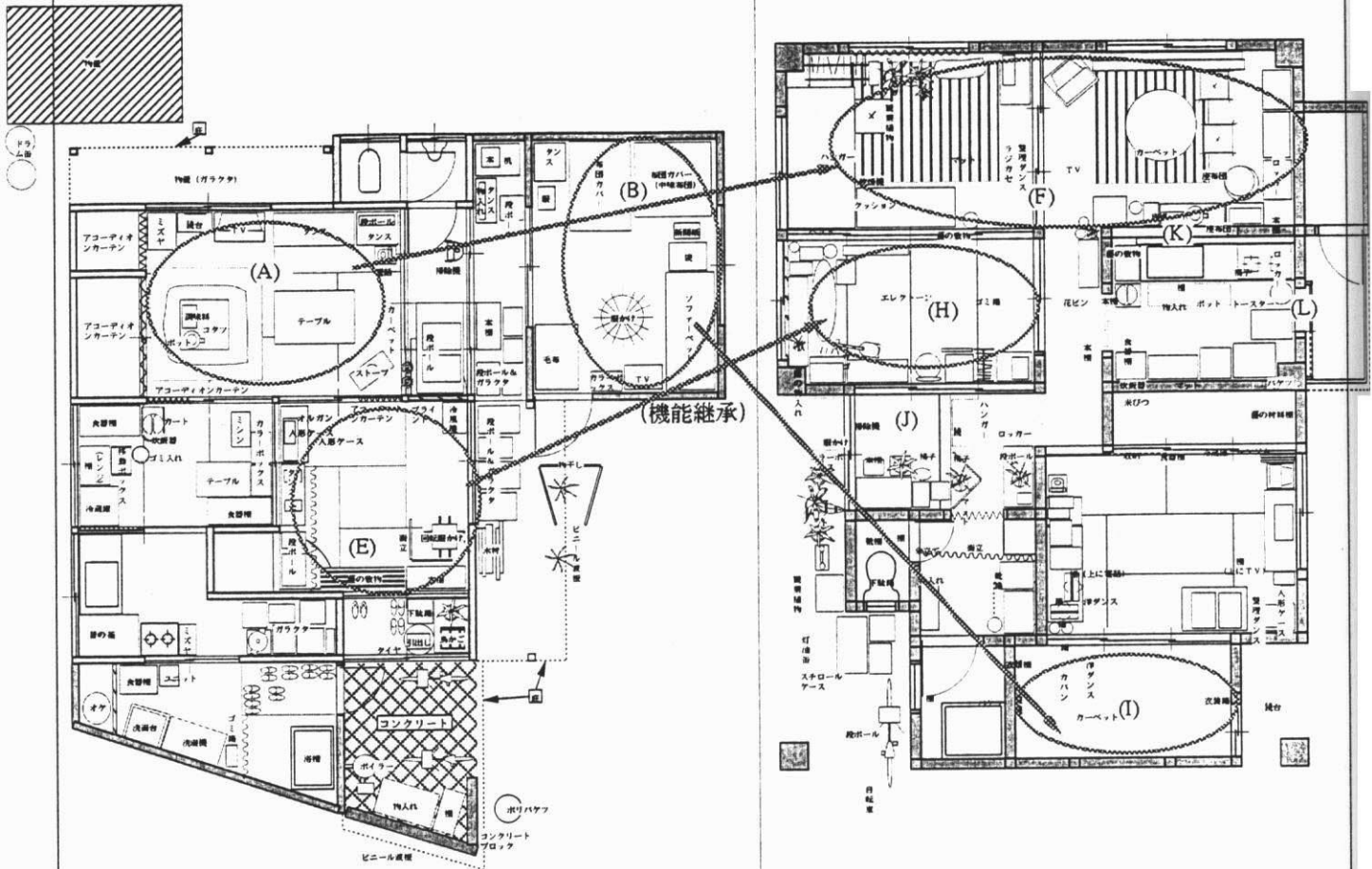
二つ目には、接客の方法や意識が変化したことである。従前は、住戸の老朽化や生活の重合によって「仕事先で『うちに遊びにおいでよ』と言われても逆に自分の家に招待しにくいので断っていた(0-1-205)」など来客に対する抵抗感があったのが、建替によって住戸が新しくなり、また少人数家族では専用の接客空間が確保される場合もあり、「妻が気軽に友達を呼べるようになった。(0-1-205)」など接客に対する意識が積極的になっている。

三つ目には「子供が夜中でもトイレに行ったり、寝室と勉強部屋を行き来するときに6畳を通過するので落ち着かなかった。(0-1-301)」など従前の開放・連続的な居室構成や増築によって居室内に発生していた通過動線が解消され、個々の居室の安定化が図られていることである(図3-5)。

その他、雨漏り・腐食などの老朽化の問題や低水準の設備、住戸の狭小性などが改善さ

【ワンルーム化】

M—F → M—F
f

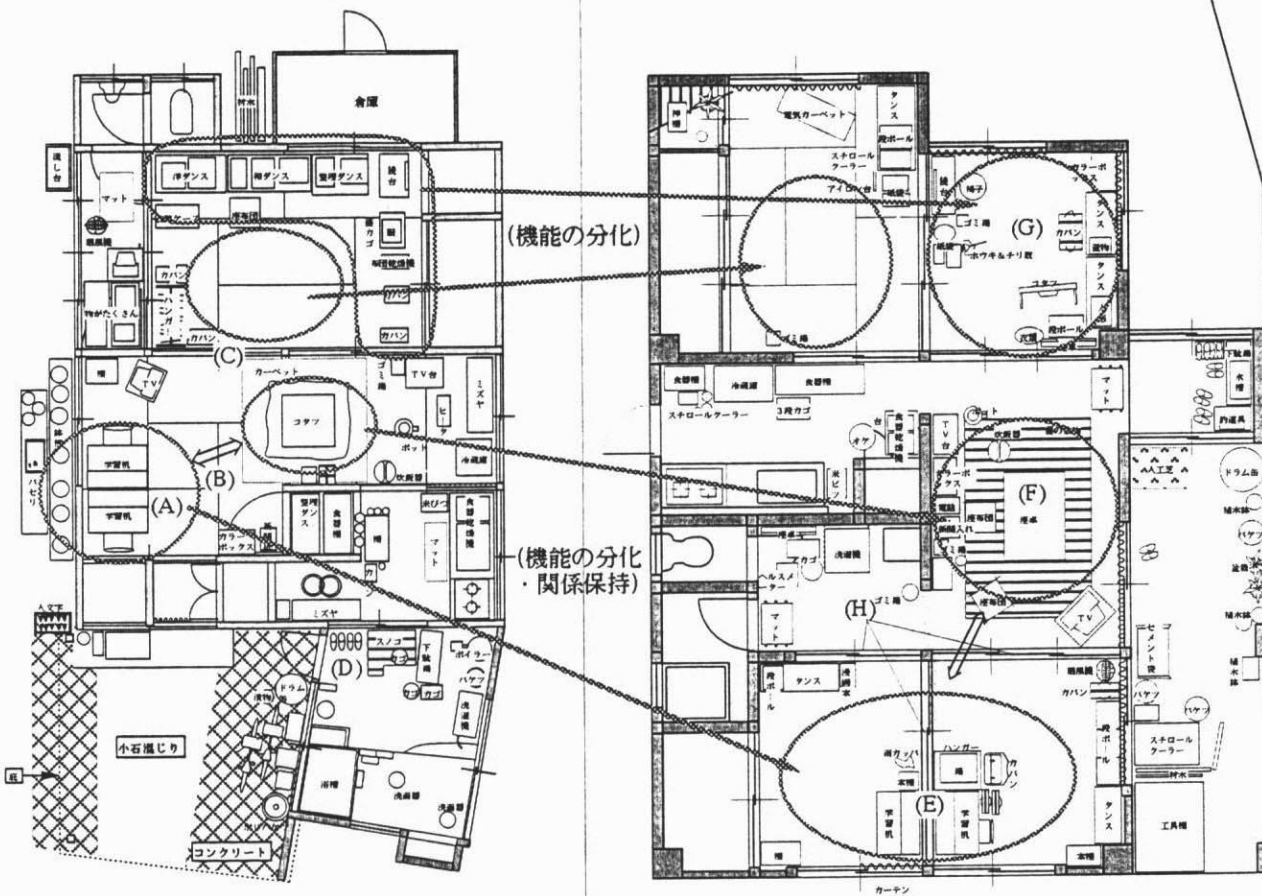


1m 図	建 築 前	計 画 時	計 画 後
生活の変化	<p>生活の魅力・価値観 ＜ワンルーム的生活＞ (A)今の生活は6帖で完結している ＜就寝の床座指向＞ 寝るのは畳の上が良い板張りやベットのはいやだ ＜物置の有用性＞ (B)物置があると何でも入れていたら便利 ＜親子の関係の近さ＞ 狭いからよく顔を合わせたから親子関係は良い ＜住まいへの愛着＞ 狭いながらも工夫をしているフスマをはずしアコーディオンカーテンにした(押入のフスマを取った)住めば都で愛着がわく ＜ハレとケの意識＞ 玄関を開けてもゴタクに座していると顔が見えないのでよい。玄関には前は色々な物があつた ＜勝手口の利用＞ 用事は勝手口からする手口で鍵はかけていない</p>	<p>住 要 求 ＜計画案の展開＞ 当初、ワンルームを希望したが、多様な場をつくるために、ワンルーム的性格を残しつつ3室続き間に変更。 ＜納戸を計画＞ 荷物が多いため、4帖の納戸を計画 ＜対面キッチンの採用＞ 対面キッチンは見学会の時いいなと思った</p>	<p>魅力・価値の継承・展開 ＜ワンルーム的生活の展開＞ ＜居住性の向上＞ (F)生活の中心は2間続きの洋間である。4帖の和室のために、ワンルームの性格を残しつつ3室続き間に変更。 ＜倉庫の有用性＞ 今倉庫には季節の物や使わない物が全部入っている ＜ハレとケの継承＞ 家は食堂が奥になっているから非常に良かったと思っている (H)今、考えているのは4帖の部屋を片付け、本棚・ロッカー・テーブルを置き、客が来た時に使えるようにすること ＜生活観＞ 住めば都と言いますから徐々に愛着がわくのではないですか ＜間取りの評価＞ 間取りとしては非常にいいと思っている</p> <p>前空間の問題が改善 ＜玄関の暗さ＞ 玄関入った所が少し暗い ＜空間への戸惑い＞ 台所の窓は開いていていいのだけれど、娘はそこから茶碗を渡すけど私はわざわざまわる ＜ハレとケが混乱＞ 勝手口は使いにくいすぐ道だから開けると中まで見えるゴミは今玄関から出すからいいのだけれど台所のために</p> <p>問題の持続と発生 ＜食事形式の葛藤＞ 以前はLDで、テーブル・椅子で御飯を食べていたが、今はやめた。日本人は座った方がいい大きいテーブルで食事という考えもあつたがその部屋は食事しか出来ない ＜空間と生活価値の拮抗＞ テーブルで食事をする部屋を多目的に使えなくなる。テーブルと椅子で食事したのはこっちに移ってテーブルがあつたし憧れもちょっとあつた やはり座った方がいいから今は座卓で食べる。どうせ団らんも座ってするから</p> <p>新たな魅力・価値 ＜空間の多様性・納戸的機能＞ 何かある時、邪魔な物は4帖の部屋にしまう ＜収納の充実＞ (I)クローゼット(納戸)は今未整理の物が一時的に入っている</p>

図3-3-1 住まい方の変化 (I m)

【関係保持&空間分化】

M—F
m f

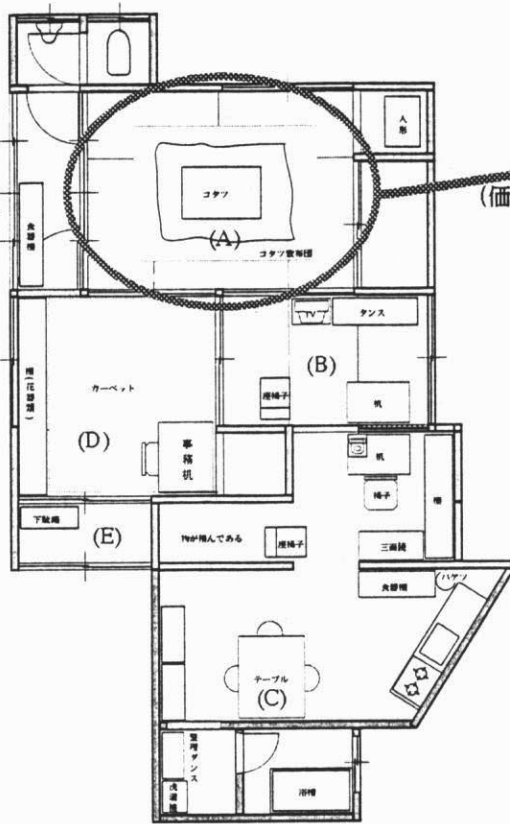


Tb	建 替 前		計 画 時	計 画 後		
	生活の魅力・価値観	生活上の問題	住要求	魅力・価値の継承・展開	前空間の問題が改善	問題の持続と発生
生活の変化	<子供同士の関係の近さ> (A)部屋が狭いと兄妹面倒を見る。	<台所の狭さ> (台所は狭いので)釣ってきた魚などは風呂場で洗う	<子供の空間> (A)個室 (子供の)は、良い面と悪い面がある。子供は自分の部屋が欲しいという部屋がなくてもこの感じは残したい。	<子供部屋> (E)子供の部屋も2つに分けないといけなくなった。実際良くなったのは子供部屋を個室で1つずつつくってあげたこと		<子供の関係の変化> (H) (子供部屋のガラス戸が全部透明であるため) 子供同士着替えたりするときはのぞかれたくないという気持ちがある
	<家族の関係の近さ> (B)子供は食事が終わったあと同じテーブルで勉強する子供との関係は近い		<家族の関係> (F)リビングを中心に各部屋に行ける (家族の中心)			
	<間取りの開放性> (C)間取りは使い勝手がよい (開け放てば広く使える。)		<間取りの開放性> 入り易く、出易い、流れがいい計画だから、どこからでも出られる			
	<季節感のある暮らし> 冬の暖房は、ストーブとこたつで、戸は閉める。夏は扇風機と自然の風		<季節感のある暮らし> 夏場はリビングは涼しいから東側の窓・カーテンを開けて網戸にすれば、ここで寝るのが最高			
	<接客> 接客のために部屋を確保するのではない。(部屋を片付け客を受ける。)	<玄関の狭さ> (D)玄関には下駄箱をおくところがないから出入りは勝手口が多い		<食事形態> (F)リビングが板間だったがテーブルで食事をしようとは、絶対思わなかった		
				<接客> 座卓はお客が大勢来たときに足を折ればどこでもおける。		
				<タンス・着替え> (G)タンス置き場をつくり、着替える場所を4.5畳にした		

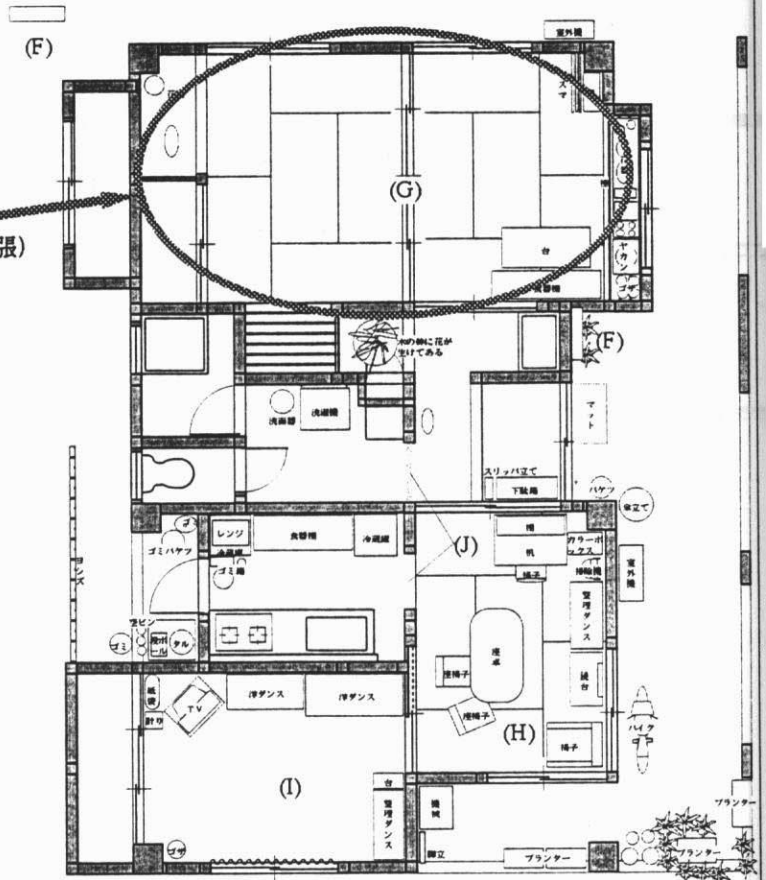
図3-3-2 住まい方の変化 (Tb)

【価値の拡張】

F
m



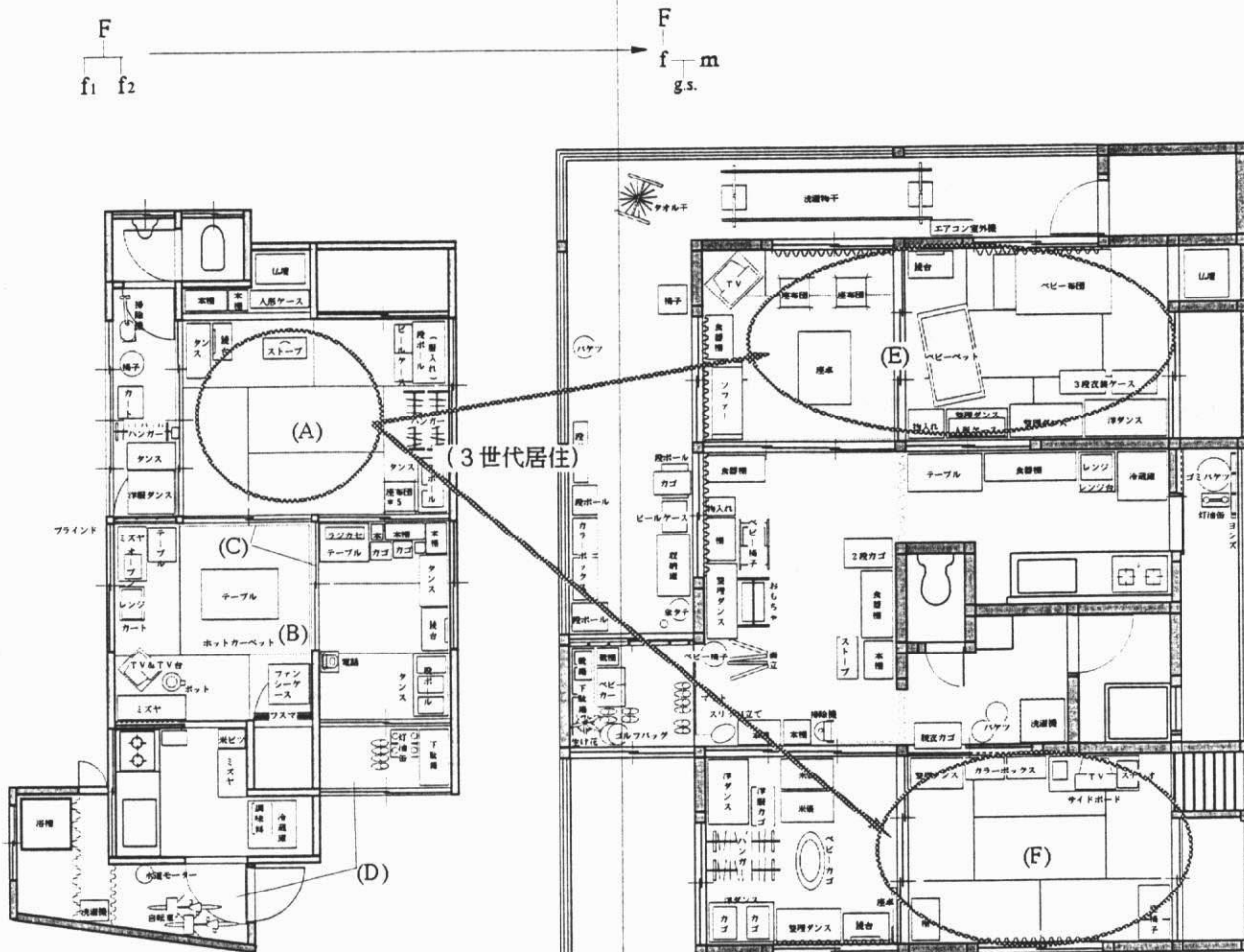
(価値の拡張)



Mr	建 替 前		計 画 時		計 画 後		
	生活の魅力・価値観	生活上の問題	住要求	魅力・価値の継承・展開	前空間の問題が改善	問題の持続と発生	新たな魅力・価値
生活の変化	<p><生活基盤></p> <p>(A)お花を6帖で教えるので開けておく</p> <p><親子の関係の近さ></p> <p>(B)子供部屋は作らない(何をしていたかわからないから)広いところがあって何でも目が届くところが良い</p> <p>親子の関係はオープンである</p> <p><生活の開放性></p> <p>(B)間仕切りやフスマは普段開けているが視線に対して子供は気にしていない</p> <p><住様式></p> <p>(C)食事は以前からテーブルで食べていた女性はそっちの方が良い(立ったり座ったりするのが面倒)</p>	<p><子供の空間要求></p> <p>子供は子供部屋が欲しいという</p> <p><住戸の老朽化></p> <p>(D)前はものすごく清潔にはしていましたが掃除してもなかなか綺麗にならなかったという気がしなかった</p> <p>畳が古いからカーペットを敷いている</p> <p><空間の狭小性></p> <p>(E)玄関が狭い(広い方が良い)</p>	<p><生活基盤の確立></p> <p>お茶とお花のお稽古場が欲しい。そのために二部屋と和室の続き間</p> <p><子供の空間の確立></p> <p>子供部屋の確保</p>	<p><生活基盤の確立></p> <p>(F)お花の看板はここが新しくなったら取付けようと思っていた</p> <p>(G)北側の続き間はおけいこ事にしか使わない建て替えて良かったと思う。おけいこするのに仕事がしやすくなった</p> <p><生活の再構築></p> <p>部屋の使い方は当初考えていた通り。案外、便利に使わせてもらっている</p> <p>(H)全部南和室で兼用南側の和室で食事をする(団らんもここで)</p> <p>南側和室で寝る</p> <p>書斎も南側和室に置かないと仕方がない</p> <p>泊りのお客がある時は続き間で寝てもらう。普段は南側和室に居てもらう</p>	<p><生活基盤の確立></p> <p>(G)生徒のおけいこ場に対するイメージが変わったと思う。今回は生徒が来るのに友達を連れてきやすいという感じ。前は連れてきてもこんなところでした。お茶やお花は何かきちんとした処・奇麗な処というイメージがある</p> <p><子供の空間の確立></p> <p>(I)南側の洋間は息子が帰って来た時に使っている。友達が来た時に使いやすい場所(落着く場所)。もし南側和室だったらお客が来た時に居場所がなくなる出入りもしやすいように</p>	<p><生活様式の変化></p> <p>前居では椅子座で食事、それが今は出来ない。後で南和室を板間にしてテーブルを置き、洋間を畳にすれば出来ないことはないかなと思ったと思うが、北側の続き間は使えないからここに家具とか置くと狭くて使えなかったろう</p> <p><間取りと使い方の対応></p> <p>(H)自分のくつろげる場所をと思い南側の部屋に畳を敷いたが板間にして、奥の洋間と台所を繋げば広く使えた。食事を奥ですればお客さんが来ても今の南側の和室の場所で対応すればいいやはり使ってみないと知恵がでない</p> <p><建具の問題></p> <p>(J)玄関前や台所は建具がつくとばかり思っていた当然のことだから要望にも出さなかったら付いていなかった</p> <p><イエづくりの難しさ></p> <p>自分で家を建てるにしても皆さん言われる「何回建ててもここはこうすれば良かったというのがある」ってやっぱり難しいものですね</p>	<p><ハレとケの意識></p> <p>見えるところでは寝そべれないしくつろげない</p> <p><住まいへの愛着></p> <p>愛着はやっぱりあります(何か自分の家みたいな感じ)</p>

図3-3-3 住まい方の変化 (Mr)

【3世代居住】

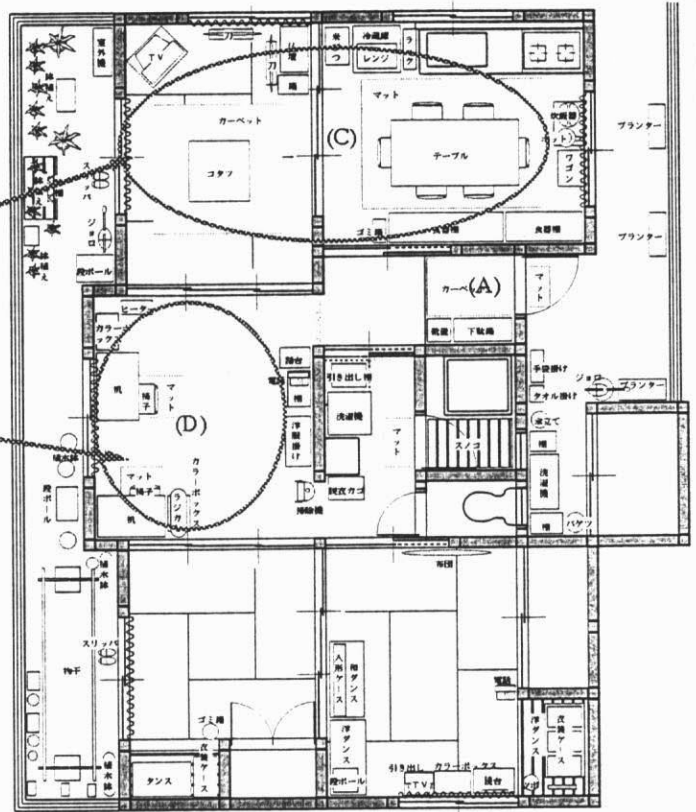
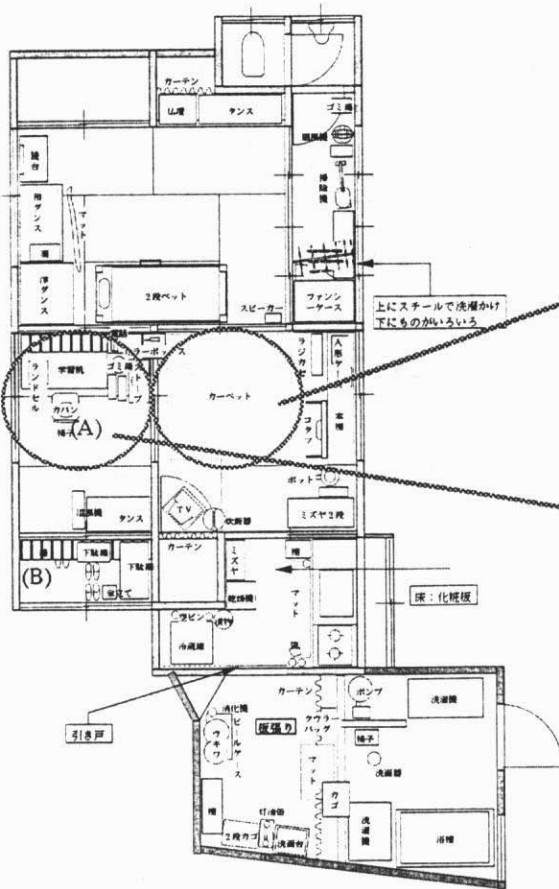


Kt	建替前		計画時	計画後	
	生活の魅力・価値観	生活上の問題	住要求	魅力・価値の継承・展開	新たな魅力・価値
生活の変化	<p>＜親子の関係の近さ＞</p> <p>(A)娘が高校を出てカーテンを1つにして開け放った</p> <p>6帖は子供の部屋とみんなの寝室を兼ねる娘と母の関係はオープンな関係</p> <p>子供は別に個室を欲しがらなかった</p>	<p>＜空間の不足＞</p> <p>友達が遊びに来た時、服を着替えるところがない</p> <p>個室は欲しいときがあったが仕方ない</p>	<p>＜家族構成の変化＞</p> <p>2世帯住宅にして欲しい</p>	<p>＜関係を保持しつつ生活を展開＞</p> <p>(E)今は私の部屋(4.5畳、6畳の和室)はフルに活用みんなの憩いの場所、家族団らの場所になっている。</p>	<p>＜孫の誕生を契機とした変化＞</p> <p>(G)洋間は食事をするという考えだったけど上の娘の子供(孫)の遊び場になっている</p> <p>テーブルと椅子を置いたら狭いし、子供が玄関から入って来るから洋間は子供の遊び場にしたい方がいいなと思った</p> <p>当初二所帯住宅だったけど子供が大きくなったりするとまた変わるだろう</p>
	<p>＜オープンな関係＞</p> <p>(B)娘の友達が登遊びに来るがオープンな感じで食事を一緒にする</p> <p>＜生活の開放性＞</p> <p>(C)建具は開けっぱなし、フスマは取っている(家を広く見せた)</p> <p>＜空間の明るさ＞</p> <p>今まで一戸建に住んでいたから昼間から電気を付けて入ることはなかった</p> <p>アパートなんかは昼間から電気を付けられないといけないがそれが本当に嫌い</p>	<p>＜玄関の狭小性＞</p> <p>(D)自分達は普段玄関から入り娘の友達は勝手口から入る</p>	<p>＜居住性能＞</p> <p>トイレが暗い。もっと明るくして欲しい</p>	<p>＜オープンな関係＞</p> <p>あんがいみんな仕切っていないから気軽に入ってくる</p> <p>＜空間の開放性＞</p> <p>(E)最初入った時は続き間はフスマをしていたが孫が出来てから外した(昼間寝かしとかないといけなかった)</p> <p>＜居住性能の向上＞</p> <p>私が一番気に入っているのはトイレ もう最高</p>	<p>＜前空間の問題が改善＞</p> <p>(F)娘夫婦の部屋は普段閉めてある</p>

図3-3-4 住まい方の変化 (K t)

【ファミリールームとDK】

M—F
f1 f2

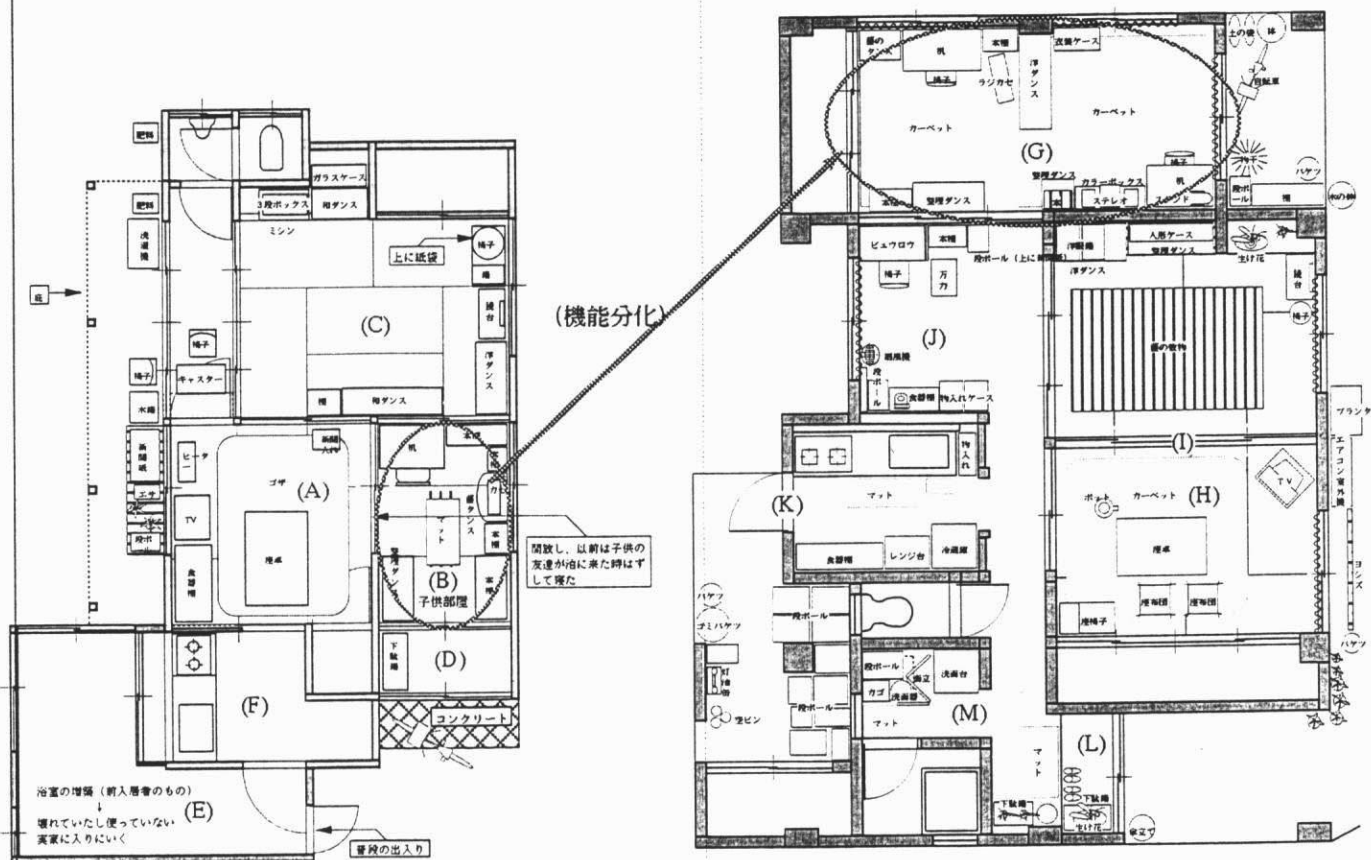


M邸	建替前		計画時	建替後		
	生活の魅力・価値観	生活上の問題	住要求	魅力・価値の継承・展開	前空間の問題が改善	問題の持続と発生
生活の変化	<p><生活の組み立て></p> <ul style="list-style-type: none"> 夫婦2人で狭いながらも快適であった 建て具をはずしたのは入居してすぐ 2人の子供はテーブルで勉強をする(中学生ぐらいなら机が欲しい) <p><家具></p> <ul style="list-style-type: none"> 玄関を上がった部屋に家具を置く 家具や物の置き方は工夫した <p><表出></p> <ul style="list-style-type: none"> (B)玄関周りにはゴミは置かない奇麗にしている 	<p><住戸の狭小性></p> <ul style="list-style-type: none"> 建具はフスマを張ってちゃんとしていたが、息苦しい気がした 子供が大きくなり机が1つ置けない(片付けようがない) <p><空間性能が劣悪></p> <ul style="list-style-type: none"> 昼間いてもノイローゼになりそうだった(気持ちが悪い) 部屋が暗かった(1人入っているのが嫌だった) <p><外部への閉鎖性></p> <ul style="list-style-type: none"> (B)出入りは全部玄関からする 勝手口は有るが開けられない 中に洗濯物を干しているから中を見られたくない お客さんが来た時はいきなり家具が丸見えだから難しい <p><住戸の開鎖性></p> <ul style="list-style-type: none"> 子供が帰って来ても鍵はかけたまま昼間も開けたまま (B)夏でも玄関の戸は開けない→開ければなしは絶対しない家の中を見られたくない 	<p><子供部屋のあり方></p> <p>(A)子供部屋は開放的なのが良い</p> <p><DK></p> <ul style="list-style-type: none"> DKにテーブルを置いて食事したい。 	<p><子供部屋のあり方></p> <p>(D)子供部屋はすごくいいです。明るいし、ゆっくり2つ机が置けるし、子供達が学校あがってしまったら、ここは居間して、ソファでも置いてという感じですね。</p> <p>(D)子供部屋の形態に子供達は抵抗ない。寝る部屋と勉強する部屋が一緒の方がかえって良くないのではないかと。私は今の状態が理想だと思う。</p> <p><生活の組み立て></p> <p>(C)食事はDK</p> <p>(C)子供たちは食べたらすぐこっち(和室)に来てテレビを見る。主人は食べたあとちょっとゆっくりして和室でゴロンとする。</p> <p>・4.5帖和室が子供たちの寝る部屋。</p> <p><イメージとの合致></p> <ul style="list-style-type: none"> (実際に住んでみて、持ってたイメージ、使い方が違ったというところは)ほとんどない。 <p><DKの開放性></p> <ul style="list-style-type: none"> DKは通路に面し、視線の行き交う開放的な設えになっている。 	<p><収納></p> <ul style="list-style-type: none"> 奥の和室をタンスをおくスペースにもらった。それでちょっと押入が狭くなり、失敗したかなと思った。 <p><床仕上げ></p> <ul style="list-style-type: none"> 檜は贅沢でいいねって思っていたんですけど、すごい傷つきやすいんですよ。 <p><ひさしが短い></p> <ul style="list-style-type: none"> ここひさしがここまでしかなく、かぶっていない。洗濯物を昼間出して外出できない。 <p><欠陥></p> <ul style="list-style-type: none"> でもちょっと欠陥が出てきている。割れたりとか、隙間ができてきたりとかしている。 <p><玄関の仕様></p> <p>(E) (扉になったのは)トイレは外に出して欲しいって言ったから、私は引き戸の方がよかった。</p>	<p><生活のイメージ></p> <p>(C) (入居前に生活のイメージは)あった。まず台所にテーブルを置くというのが最大の希望だったんですよ。憧れだった。</p> <p><買った家具></p> <p>(C) 大きめのテーブル、主人が絶対買ってたから。結果的にはちょっと不便だけど、まあいいですね。主人の考えは、うちは4人家族だけど、お客さんが来た時に困るだろうと思って。</p> <p><計画プロセス></p> <ul style="list-style-type: none"> やっぱりかわった間取りだから思い入れは全然違う。だからもしここを引越すようなことがあったら、感慨ひとしおだと思えますよ。 <p><暮らし方></p> <p>(C) 生活観、暮らし方は、座って食べるのがテーブルで食べるようになった位。</p>

図3-3-5 住まい方の変化 (M d)

【機能の分節】

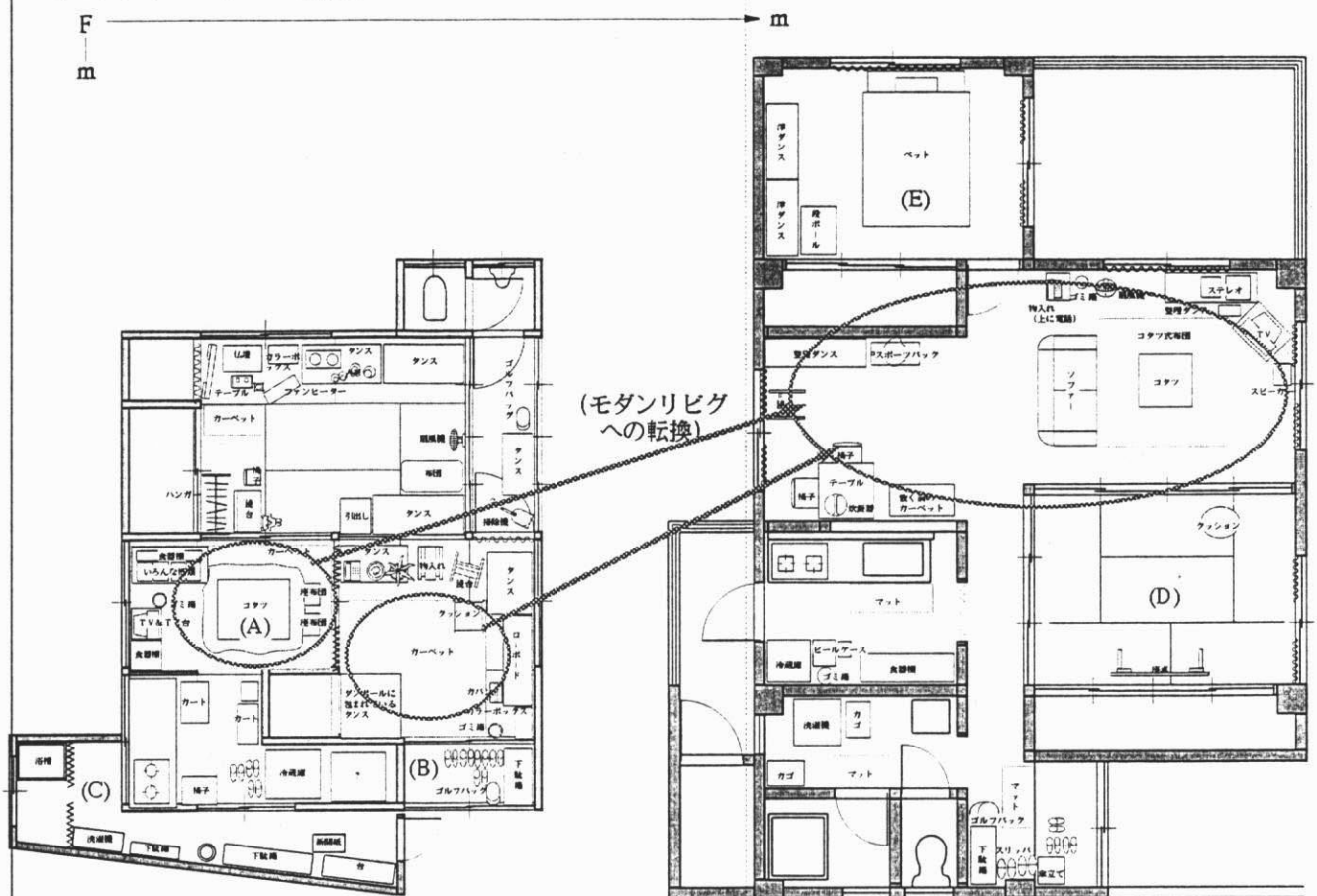
M—F
f m



生活の変化	建替前		計画時		計画後	
	生活の魅力・価値観	生活上の問題	住要求	魅力・価値の継承・展開	前空間の問題が改善	問題の持続と発生
生活の変化	<親子の関係の近さ> (A)子供は4.5帖のテーブルで勉強をする。勉強をしている時はテレビはイヤホンでMは聴く。一番下の子供は4.5帖のテーブルで勉強をしながらFと話しをする。	<玄関の狭小性> (D)玄関は狭いし、勝手口に普段使う靴を置いて玄関は客が出入り、家族は勝手口から出入り。	<子供部屋のあり方> 親子の親密な関係が有った方がよい。相手の様子が分かる子供部屋がよい。子供は新しい家と子供部屋が欲しい。	<親子の関係の近さ> (G)娘は入居後すぐ「私は明るい方」と部屋を決めた。最初は珍しくて自分の部屋で勉強をしていた。	<勝手口の利用> (K)勝手口はゴミを出したりする時に使う。	<親子の関係の喪失> 昔は中廊下なんか無く家族がいつも顔を合わせる機会があった。
	<子供の関係の近さ> (B)子供は部屋・机を共同で使っている。	<住設備の悪化> (E)風呂は壊れていて自分の里に入りに行く。	<ハレとケの意識> 玄関からすぐDKやLが見えるのが嫌だった。	<子供の関係の展開> (G)子供部屋は家具で仕切り2人で。息子がよく友達を連れて来て娘の部屋が見えたら家具を移動。いずれ子供は別々の部屋にしたい。子供が出たら一つの部屋に考えている。	<収納の充足> 押し入れをつくっていただいたから収納はよい。	<開取りの問題> (M)当初案はトイレと風呂場が逆だったと思う。いつか来るか分からずおちおち入れない。
	<面積充足> 子供がいなくなったら面積は十分。	<空間性能が劣悪> (F)台所は入居時のままで天井は暗い。	<空間性能の向上> 明るい台所。	<生活の開放性の実現> (I)続き間のフスマは開閉が面倒だから外した。(H)食・団は南6畳で一緒に寝るはその隣。夏は続き間にして(娘と夫婦は)寝ていた。板張りより畳の部屋の方が落ち着く。続き間にしてもらって良かったと言っていた。	<仕上げる違和感> コンクリートがもう少し少なければ(何か冷たい感じ)。	<住まいへの戸惑い> まだ、他の家に住んでいるような感じ。自分達の要望は聞いてもらったものの、どのように使っていくか戸惑い。この前も「まだ、釘も打っていないの、打っていいよ」といわれたが、...入居後他の人の家を見て気がついたところ。
	<生活の開放性> (C)6帖にはテーブルは置かないなるべく開放的に使いたい。フスマを外し広く使うことは何回もあった。	<収納の不足> 客の為に片付けようとするが片付かない(道具を置く所がない)。この家で困るのは収納が少ないこと。	<続き間要求> 和室二間続き間を希望。	<生活の開放性> なるべく開放的に使いたいの。フスマで仕切られた部屋が良い。今までの感じの住まいを希望した。		
	<趣味の空間> (A)4.5帖はMの趣味をする部屋でもあり本を読む場所でもある。	<将来の家族> 自分達の老後は夫婦だけで住む。	<専門家への依存> あとの専門的なことは任せた。	<趣味の空間の実現> (J)当初書斎になる予定が子供が個室が欲しいということでMが追い出された。当初予定したDはMが机を置き書斎みたいにした(今はMの部屋に)。		

図3-3-6 住まい方の変化 (T t)

【モダンリビングへの転換】



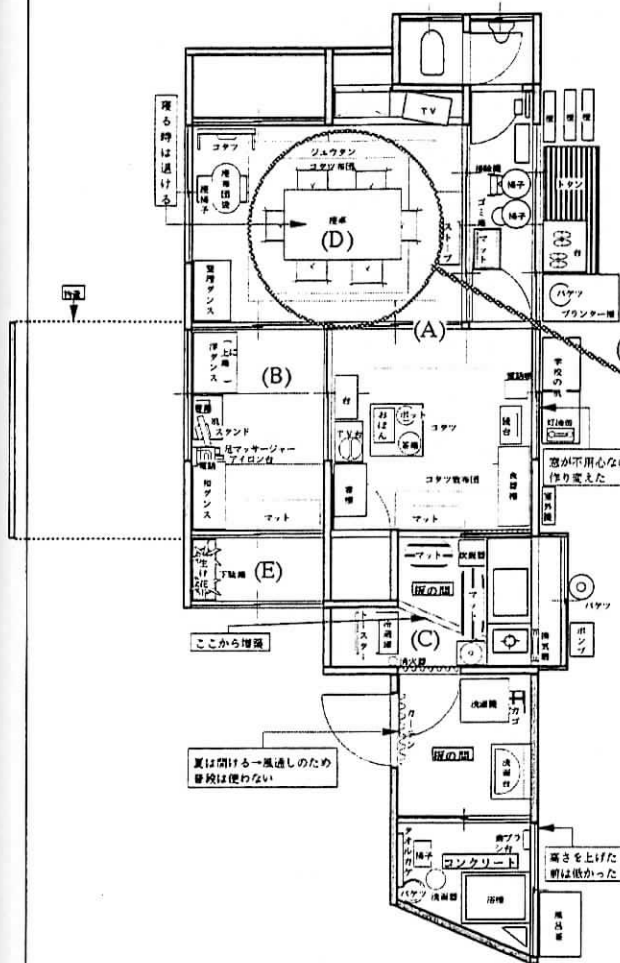
U n 住	建 替 前 (母親の意見)	計 画 時 (息子の意見)	計 画 後 (息子の意見)
生活の変化	<p>生活の魅力・価値観</p> <p>＜生活の組み立て＞</p> <p>(A)台所は自分の城という気がする。台所で寝たいくらい。台所で食べて居間でくつろいでもう一部屋で寝る。8帖の台所が欲しい。台所を広くして自分の部屋は4.5帖でよい。(茶の間は3帖でよい)</p> <p>＜しつらえ意識＞</p> <p>(B)玄関先はお客さんに関係せず綺麗にしとこうという気がある</p>	<p>生活上の問題</p> <p>＜住戸の老朽化＞</p> <p>長い年月の間に雨や日照でガラスは動かない。ガラス戸の枠がはずせない。ガラスの交換ができない</p> <p>＜空間性能の劣悪さ＞</p> <p>洗濯物は中で干すが、スレート屋根なので暑い。(C)風呂場へは下駄を履いて行く。子供は会社の風呂に入る</p> <p>＜住戸の狭小性＞</p> <p>家具はほとんど動いていない。家具は小さい物にする。テレビも大きいから小さいのへ買い替えた</p> <p>＜狭小性・非合理性＞</p> <p>以前はもう少しさっぱりしていた。自分としては物や家具を余分に置きたくない</p> <p>＜間取りと生活のずれ＞</p> <p>玄関前が3帖の茶の間で今の茶の間が4.5帖あれば良かった。(自分の部屋にした)</p>	<p>住要求</p> <p>＜想定される状況の織り込み＞</p> <p>親が泊まることを前提に計画</p> <p>＜家族変化を想定した計画＞</p> <p>将来、結婚することを前提に計画</p> <p>＜生活空間の充実＞</p> <p>食事はDでテーブルで、Lはステレオセット・TVを置くので使い方としては分けられるけど、空間的に一体化して広々と使えるようにして欲しい</p> <p>＜就寝形式＞</p> <p>寝室はベッドで寝るので板間</p> <p>＜バルコニー＞</p> <p>ゴルフの練習ができるようなバルコニーがほしい</p> <p>新たな魅力・価値</p> <p>＜家族構成の変化＞</p> <p>以前はおふくると同居。一人暮らしは初めてだし何もかも初めて</p> <p>＜生活意識の生成＞</p> <p>建て替わる事で生活を変えようと思った。今度はちゃんと真面目に家で生活をしようと思っている。以前はほとんど家に居なかった。今は家に居る事が多い</p> <p>＜生活イメージの実現＞</p> <p>ここの間取りは全部私の要望で決めた。部屋の使い方は考えた通りになると思う</p> <p>(D)和室6帖は友達 came 時みんなで雑居寝するぐらい。テーブルは朝食に使う。食事は座卓で</p> <p>(E)寝室は6帖の洋間でベッドで寝る</p> <p>＜家具の一新＞</p> <p>家具は建て替えて新しく買い替えた。入居前に部屋を見て一応家具を配置をした。今後物を増やしたい</p> <p>＜定住意識＞</p> <p>今後住み続けるつもり</p> <p>＜建て替えに対する評価＞</p> <p>綺麗なのが出来て良かったと思った。建て替わって本当に良かった</p>

図3-3-7 住まい方の変化 (U h)

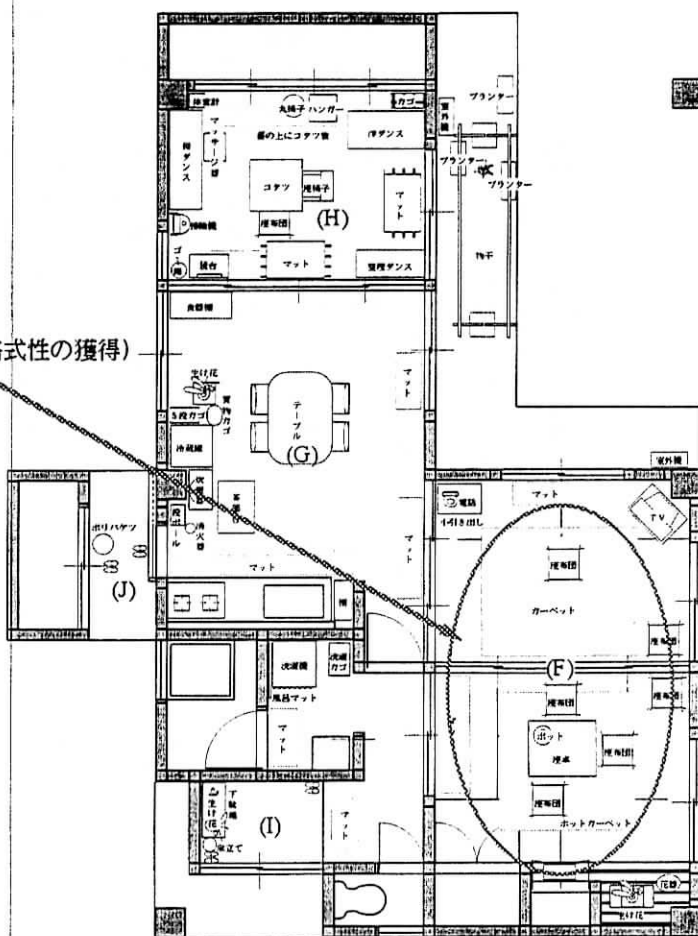
【格式性の獲得】

F

(格式性の獲得)



(格式性の獲得)



旧邸	建替前	計画時	計画後		
	<p>生活の魅力・価値観</p> <p>生活上の問題</p> <p><住戸の老朽化> 前は古かったから友達 の所はよくてうちは友 達を呼べなかった</p> <p><収納の不足> 収納がもう少し欲しい</p> <p><空間の非合理性> 前は畳に座っていたが 台所の間を立ったり座 ったりが大変</p> <p><食事分離できない> (D)6帖で寝る時はテ ーブルを片付ける 寝るのと食事は別の方 が良い</p> <p><外部への閉鎖性> (E)前は玄関からだけ出 入りをしていた</p>	<p>住要求</p> <p><空間の格式> 床の間・仏間付きの 座敷が欲しい。</p> <p><設計時の変更> トイレは最初は和式 だったが設計者に言 われ洋式にした</p> <p><DKの希望> 弟の家が板間なので テーブルで食事をした い DKで食事したい</p> <p><建て替えへの姿勢> 今の家と同じように して欲しいというこ とはない</p>	<p>魅力・価値の継承・展開</p> <p><生活の開放性> (F)続き間であることを特に 意識はしていない 間仕切りは開けている 夏は続き間を開けていたが今 はフスマが動かないから開けて いる</p> <p><生活の継承> 新しい生活をしようとは思わ なかった</p>	<p>計画後</p> <p>前空間の問題が改善</p> <p><接客の活発化> (F)南の続き間は友達を呼び たいので広い部屋が良かった 友達は今よく遊びにくる</p> <p><設備の充実> 設備は整っているし、便利 になった</p> <p><生活の合理化実現> (G)食事はDKでテーブルで 台所は普通、対面式だけど 面倒だからDKに</p> <p><玄関の格式性> (I)玄関が引き違いというの は前よりいい</p> <p><外部への開放性> (J)鍵がついた勝手口もある し、前は玄関だけ鍵があっ たから玄関から入っていた 一番よく出るのは勝手口、 洗濯物を干したりする この家はどこか らも出られる</p> <p><メンテナンス性> 今は掃除はしやすいしよ かったと思っている</p> <p><くつろぎ空間> (H)東側洋間は本とかを静 かに読んだり、くつろいだ りする部屋だった</p>	<p>新たな魅力・価値</p> <p><使いこなす意識> どの部屋をどのように使 うか考えていない少しず つ考えていこうと思っ ている 最初は板の間で次に畳を 敷いても良い</p> <p><住まいへの充足感> 家賃が高くなってもこん ない家に住まわせても らうならいい</p>
生活の変化	<p><生活の開放性> (A)私は開めるのは嫌 私は広い方が好き</p> <p><ハレとケの意識> (B)玄関を上がって3 帖の何も使っていない 部屋が1つあって茶の 間になるのが良い 3帖を茶間の一部 3帖の部屋はダンス置 き場である 間取りは良い方であ った</p> <p><しつらえ意識> 家の中は奇麗であるが 別に客を意識している わけではない 友達の家に行くと刺激 になる</p> <p><安心感> ちょっと出かける時は 戸締まりはしない</p> <p><空間性能> (C)台所は明るくて良い</p> <p><くつろぎ空間> (A)くつろぐ部屋は決 まっていらない</p>				

図3-3-8 住まい方の変化 (I i)

建替前	建替後
生活上の問題	問題の改善
<p><生活の重複></p> <ul style="list-style-type: none"> ・食事・就寝・接客、何でも一緒にの部屋なのは嫌だった (5-101) ・「居間兼応接間兼寝室」食事・団らん・接客・就寝も全部重なっていた。(1-301) ・食事・団らん、夫婦就寝すべて6畳で、寝室というものではなかったが、そんな贅沢な生活は出来なかった。(1-201) ・子供達が親と一緒に寝るのを嫌がっていたので6畳は応接間・食堂・居間・夫婦寝室を兼用していた。落ち着かなかった。(1-202) ・6畳は食事、団らん、接客、子供の就寝の場。(1-203) ・4.5畳は、親の就寝、子供の勉強の場で夫婦専用の部屋はなかったそんなぜいたくは言えなかった。(1-203) ・4.5畳は子供室、6畳は食事、団らん、夫婦就寝の場になっていた。(1-206) ・6畳は食、団らん、子供の部屋として利用。(1-205) <p><接客></p> <ul style="list-style-type: none"> ・来客時にあまり感じが良くなかった。(5-101) ・特に来客時などに不便を感じていた。(1-202) ・仕事先で「うちに遊びにおいでよ」と言われても逆に自分の家に招待しにくいので断っていた。(1-205) <p><動線の交錯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・風呂に入る時は子供部屋を通らなくてはならないから、早く団地を出て家をつくろうと言っていた。(1-301) ・子供が夜中でもトイレに行ったり、寝室と勉強部屋を行き来するときに6畳を通過するので落ち着かなかった。(1-301) ・娘2人に息子1人なので息子の部屋を増築したが、息子は娘達の部屋を通して出入りしていた。(1-202) <p><老朽化></p> <ul style="list-style-type: none"> ・木材が腐らなかつたら前の住宅でも良かった。(5-101) ・トイレや台所の柱が腐っていて気持ちが悪く、いつ壊れるか不安だった。(1-203) ・若いから住めたが、家がとにかく古くて、子供も恥ずかしいと言っていた。誕生会などで友達の家に行くときれないのにうちはボロ。(1-205) ・屋根から雨漏りしていたが、セメント瓦なので修復不可能だった。(1-204) ・二間に台所で風呂もなかった。(1-206) ・風呂も自分達でつけた。(1-305) <p><狭小></p> <ul style="list-style-type: none"> ・4人で住むには狭かった。(1-203) (1-205) ・水害住宅として急ぎよ建てたもので、人が住める最低限の家だった。(2-203) ・二人だったので部屋の増築はしなかったが、二人で暮らすのがぎりぎりの広さだった。(2-203) ・引っ越してきたときに、これだけ広かったら十分だと思った。(1-305) <p><間取り></p> <ul style="list-style-type: none"> ・4.5畳を寝室にしていたが、冬は寒いし、玄関に入ってすぐの位置で「玄関番」みたいで嫌だったので、6畳で寝ていた。(2-203) 	<p><生活の分離・確立></p> <ul style="list-style-type: none"> ・寝室には他人は絶対に入れない。(5-101) ・自分の場所と接客の場をきちっと分けられるようになったのは良い。(5-101) ・客がDKを通らなくても良いように北6畳を改まった客の応接の場に行っている。(1-201) ・親夫婦専用の部屋があるので落ち着ける。(1-202) ・夫婦の部屋を期待していなかったが、三部屋あるのでとれた。自分専用の部屋が出来て落ち着く。(1-203) ・娘も個室ができて喜んだ。以前から欲しいと言っていた。(1-203) ・4.5畳は静かでいつでも休めるように、ベッドを入れて夫専用の部屋に行っている。(1-206) ・子供は部屋の取り合いをするくらい、個室が持てたことを喜んだ。(1-301) <p><接客></p> <ul style="list-style-type: none"> ・改まった客との食事や宿泊などの応接は北6畳。普段から座卓を置いている。(5-101) ・洋間が接客の場なので来客時でも自分の部屋で自由に過ごせる。(1-202) ・妻は、気軽に友達を呼べるようになった。(1-205) ・改まった客の時は、南和室に応接台を出して食事をする。(2-203) <p><動線の交錯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・南の6畳は落ち着ける場所になっている。(1-301) ・続き間はないが個室でプライバシーが守れる。(1-202) <p><設備の改善></p> <ul style="list-style-type: none"> ・風呂、給湯器、水洗便所があり、やっと人間らしい住宅に住めるようになった。(1-206) ・風呂などが便利になっている。ひねるだけでお湯が出るのが一番良かった。(1-305) <p><狭小性の解消></p> <ul style="list-style-type: none"> ・入居当初、これくらいの広さがあればゆっくり出来たと思った。(1-203) ・いいな、広いなと思った。(2-203) ・今まで二間で狭くて嫌な思いをしてきたので、従前は2種住宅だったが今度は1種に入居した。(1-301)
問題なし	
<p><増改築によって従前住戸の面積や部屋数の増加></p> <ul style="list-style-type: none"> ・台所も玄関も倍位に広げ、床も板張りにし、流しも替え風呂も増築していたのでそんなに不便は感じなかった。ただ風呂に行くときに冬寒いという程度。(5-101) ・台所、風呂、子供の部屋を二部屋増築し、隙間を物置に使用したので結構広かった。建て替えなくてもこのままでいいと思っていた。(1-204) (1-201) 	

図3-4 従前の問題の改善

建替前の住まい方

建替後の住まい方

間取り・住まい方の変化

住まい方の特徴

M—F
f1 f2

M—F
f1 f2

玄関前に浴室をつくったのは
玄関からすぐにいけるから

最初には姑さんの部屋だった
姑さんが亡くなりベットだ
け移した
(増築は趣向がする)

入居当初つくったお風呂
(半分物置)
浴室を新しくした後は物置

物置

玄関と右所に
板をはった

見えにくい処
に棚を付けた

(D)浴室は子供部屋の増
築のついでに作り替えた

(B)お風呂に行く時
はCの部屋を通る

(D)下で道がベチャベチャになるか
ら玄関までコンクリートを敷いた

(D)池をつくった

(C)星間は子供達がいないから近
所の人は子供部屋から来ていた

教育のために早くから子供部屋は用意した
敷地一杯に4.5帖の部屋をつくった
(Mが建築関係の仕事をしてたから材料は
そこから)

(A)勉強をするとき
だけ開けていた

(D)隣の空家の庭を使って
菜園をつくっていた

下を通られる方に
「ちよっと」と声をか
ける

客間にしたい (人が来
ても泊められない)

(A)食事の後はf1とf2
は2人でテレビを見る

(A)大きく変わったのは団
らんをしなくなったこと

(ロ)たまには座
卓で食事をする
(懐かしい)

食事を椅子座するのは6
帖和室を広く使いたくない
→夫婦だけの部屋にしたい
子供が家にいる日は片後間
として使う 洗濯物でべ
台所が近いことが多くか
ら夫婦の部屋にした

(D)物入れをつくった

(A)子供は絶対に
部屋を開けない

(ロ)鉢植えはMが定年してす
てとがないからしている (花とかは
Fが近所からもってくる)
増えていく

(イ)f2は洋間に備わっていた
(一番に部屋を選んだ)

(イ)テーブルで食事をした
いという慣れがあった
入居して直ぐ買いいった
だんらんがなくなった

(D)花を置かな
いとみんな同じ
入口だから分か
らない (目印)

(D)傘立てを置
置いたから壁につけた

(C)当初いつも玄
関の扉は引っぱ
り開けていた
(入り口が一つと
いうのは悲しい)

▲ (A)居室の閉鎖化・だんらんの喪失 (イ)新たな生活スタイルの獲得

(ロ)従前の生活の継承

▲ (C)住戸の閉鎖化

▲ (D)外部空間への積極的な働き掛け

▲ (E)子供部屋の独立

(A)開放的な親子関係・居室間の関係

(B)動線の錯綜

(C)縁側的な子供部屋

(D)外部空間への積極的な働き掛け

(E)2人で共有する子供部屋 (就寝・勉強)

図3-5 重合から分離へ (Md 0-1-301)

れ、「やっと人間らしい住宅に住める(0-1-206)」ことへの評価が見られる。

一方で、増改築によって従前住戸の面積や部屋数が増加していたために、建替の必要性を認めていなかったという意見や建替後の居室が小さいといった意見も聞かれる。

開放的間取り、狭小性、居室数の制約といった従前住戸から公私室型平面で面積が拡大したものへの移行に対して、生活側から住戸空間への「順応」によって、従前の問題が改善されている。住戸面積・居室数の増加や住戸の新しさなどの物的環境の改善によって従前の問題が解消され、建替の基本的目標が達成されている。

しかしながら、O・R団地以上に居室数や住戸面積の大きいN団地でも、従前の重合した生活が分離している事実があるにも拘わらず、聞き取り調査では子供部屋が確保されたこと以外に殆ど該当するような意見が見られない。その要因の一つは、N団地の居室の構成が従前住戸と同様に、居室間の連続性が高いために、生活行為が分離しつつも生活相互の関係性が継承されることで、住み手が分離を意識していないことであろう。二つ目には、計画段階で、従前の生活価値の継承・発展を計画の基軸とし、それに問題の改善のための計画を織り込む手法がとられたために、問題よりも価値重視の意識が住み手に浸透していることである。換言すれば、住み手は問題改善を建替によって実現すべき当然の課題と捉えて無自覚的になり、寧ろ生活価値を如何に継承するか、あるいは新たな価値を如何に発現するかといったポジティブチェック（正の増殖）を建替の本質的な目標に指定していると言えよう。それによって、問題の改善に留まらずに生活の質を更なる高みに引き上げることを中心的な課題にしていることが表れている。

（２）問題の持続（改善にならず）

O・R団地では従前に顕在化していた問題に対して、建替がその改善につながらなかった側面が見られる（図3-6）。

その一つは居室数の不足である。O団地の核家族では子供2人の個室と夫婦寝室でDK以外が占有され、「従前も三部屋だったし、自分達は6畳しか使えないので、部屋数が増えた気はしない。北6畳を客間にしたいので、子供には早く家を出て欲しい。(0-1-301)」という問題が生じ、建替に際して個々の居室面積を押さえてでも部屋数の充足の必要性が指摘されている。居室数の不足は、結果的に「夜や子供がいるときの来客は、仕方がないので南6畳で応接する。南6畳を安定的な夫婦寝室にしたいが、結局接客や床座での食事（鍋物など）に使用して混乱している。(0-1-301)」というような生活行為の再重合化の問題を引き起こしている（図3-7）。

二つ目には、居室面積の不足である。建替による住戸面積の拡大を契機にして息子夫婦

建替後の問題の持続と発生		
Ob	問題の持続	<p><部屋数が増えない></p> <ul style="list-style-type: none"> ・従前も三部屋だったし、自分達は6畳しか使えないので、部屋数が増えた気はしない。子供も大きくなったので部屋が広くなったような気もしない。(1-301) ・北6畳を客間にしたいので、子供には早く家を出て欲しい。(1-301) ・二人の生活が精一杯、子供がいる家庭はとても住めないと思う。(1-206) ・従前は増築していたので部屋数は以前4部屋で多いし、面積も以前の方が広がった。(1-204) <p><部屋が狭い></p> <ul style="list-style-type: none"> ・息子夫婦は親夫婦が日当たりが良くて広い南6畳を使えるように、北4.5畳を我慢して自分達の寝室にしている。(1-202) ・最初は広いと思ったが、道具を入れるとやはり狭くなる。(2-203) <p><行為の再重合化></p> <ul style="list-style-type: none"> ・夜や子供がいるときの来客は、仕方がないので南6畳で応接する。(南6畳を安定的な夫婦寝室にしたいが、結局接客や床座での食事(鍋物など)に使用して混乱している。(1-301) ・洋間は孫の勉強部屋でピアノがあるがTVもあるので皆集まってくる。孫は自分の部屋が欲しいと言っているが、4人家族で三部屋しかないで足りない。(1-201) ・洋間で親しい客の応接をしているが、団らんと接客は別にしたい。(2-203)
	問題の発生	<p><余剰室の発生></p> <ul style="list-style-type: none"> ・南6畳は仏壇があるくらい、寝るだけ。(5-101) ・北4.5畳は娘の個室だったが結婚後は物置。(1-203) <p><生活価値VS空間価値の調停></p> <p>〈調停(工夫)></p> <ul style="list-style-type: none"> ・北和室は狭いので寝室として使っている南和室に置き床をして接客の場にしている。(2-203) ・DKは狭いので、折り畳みのテーブルを置いて、使わないときには畳んでいる。(2-203) <p>〈受動的住まい方〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家に住まい方を合わせないと借家には住めない。(1-201) ・和室は寝室に使っているが、布団をたたんで収納し、臨機応変に使っている。(1-201) <p>〈住まい方の試行錯誤〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入居後に部屋の使い方を決めたので家具配置も当初は適当で、生活しながら変更していった。(1-203) ・入居当初は南和室を夫婦寝室にしていたが、車の音がうるさいので北和室に移った。(1-205) ・DKにテーブルを置くと狭くて行き来が不便になるので、色々試して、今は端に置いている。(1-205) ・北和室を当初は接客の場にしていたが、狭いので南和室に移した。(2-203) <p>〈入居してみないと分からない〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見に行っても住んでみないと分からないことがある。風呂場の使い勝手、朝日の入り方など。(2-203)
Rj	問題の持続	<p><部屋数が増えない></p> <p>「部屋が狭い」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家具を置いたら、寝られなくなる。タンス置き場が欲しい。(2-112) ・荷物が多いというが、新しく買ったものはなくて、子供が成長して増えていった。大分処分したが、今2世帯分の荷物があるので北和室に押し込んでいる。(2-112) <p><環境条件が悪い></p> <ul style="list-style-type: none"> ・前居は隙間だらけで暖房が効かなかった。(新居では)北和室はものすごく寒いし、荷物が詰まっているのでなるべく行きたくない。(2-112)
	問題の発生	<p><起居様式：床座VS椅子座></p> <ul style="list-style-type: none"> ・入居当初テーブルを買おうかと思ったが、これ以上増やせないでやめた。(2-112) ・足が悪いときに洋間に椅子を買って置いたこともあるが、やはり座った方がよい。(2-112) <p><余剰室の発生></p> <ul style="list-style-type: none"> ・一部屋完全に空いている。(3-203) <p><生活価値VS空間価値の調停></p> <p>〈空間価値を無視〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部屋の使い方はあれこれ考えなかった。とにかくものが納まりさえすれば良かった。(2-112) <p>〈順応〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しい住宅には別に抵抗感はなく、すぐに慣れた。(3-203) <p><試行錯誤の結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・冬は暖かい南和室に、夏は涼しい洋間にいる。(2-112) ・食事の場所も和室と洋間を気分を使い分けている。(2-112) ・足も悪いし北洋間が空き部屋になっていたのでベッドを買って妻専用の寝室にした。(2-213)

図3-6 問題の持続と発生

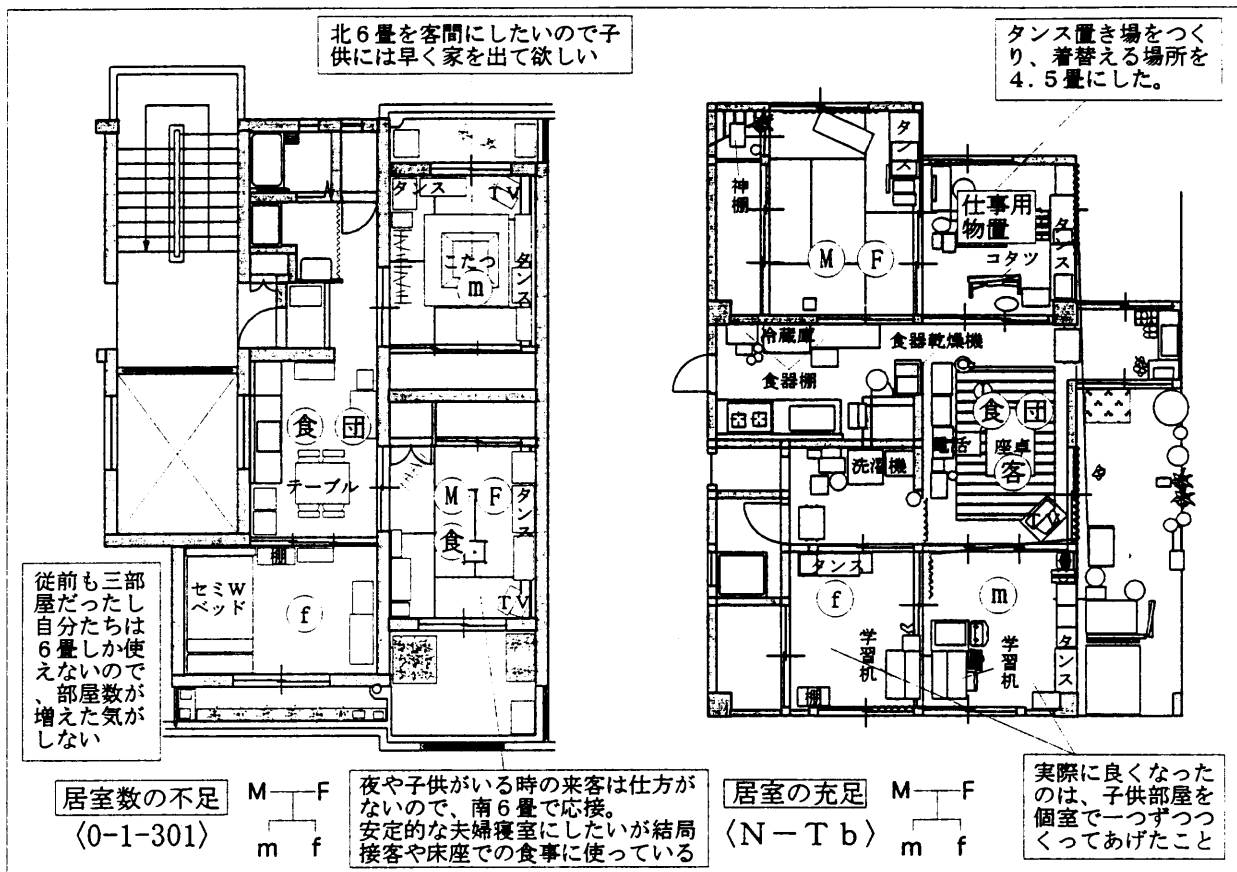


図3-7 問題の持続と改善〈核家族〉

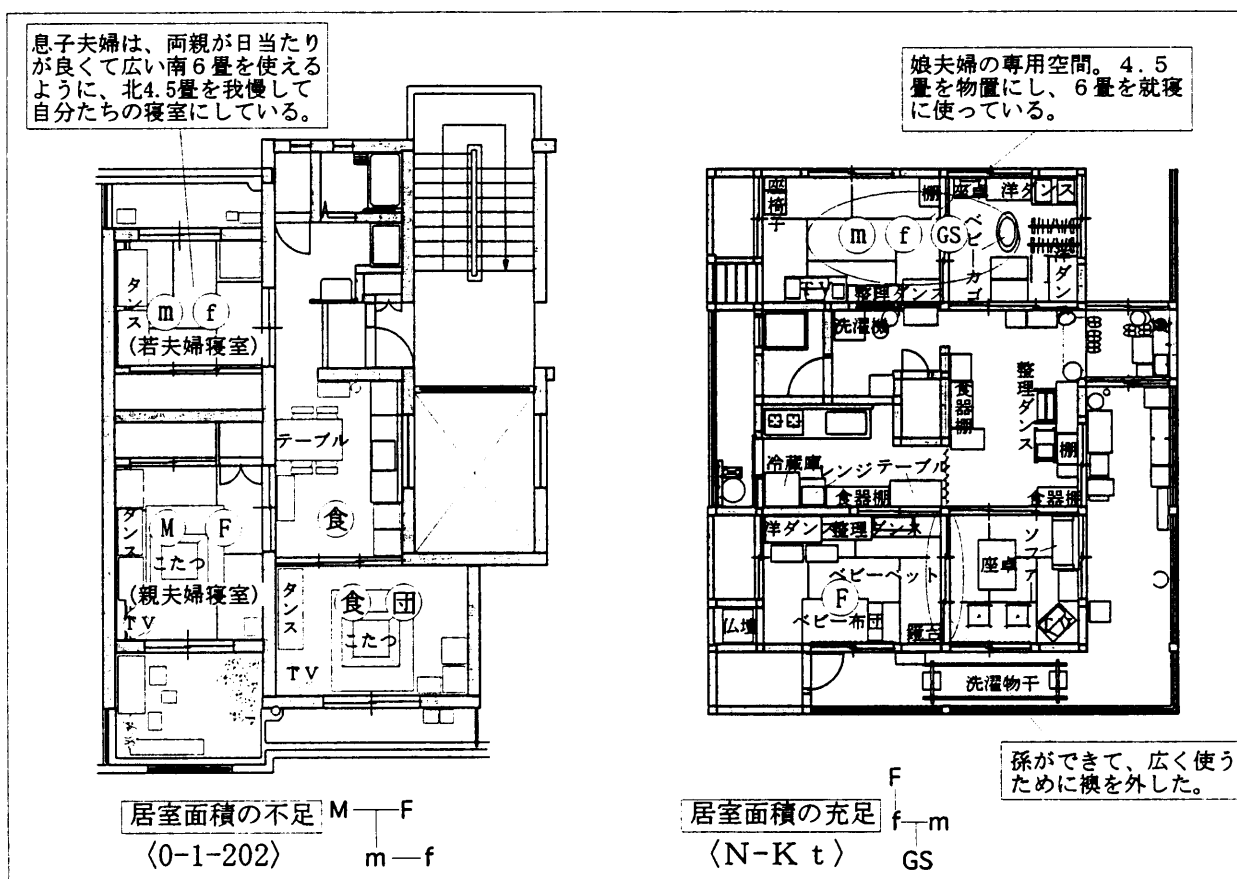


図3-8 問題の持続と改善〈三代住〉

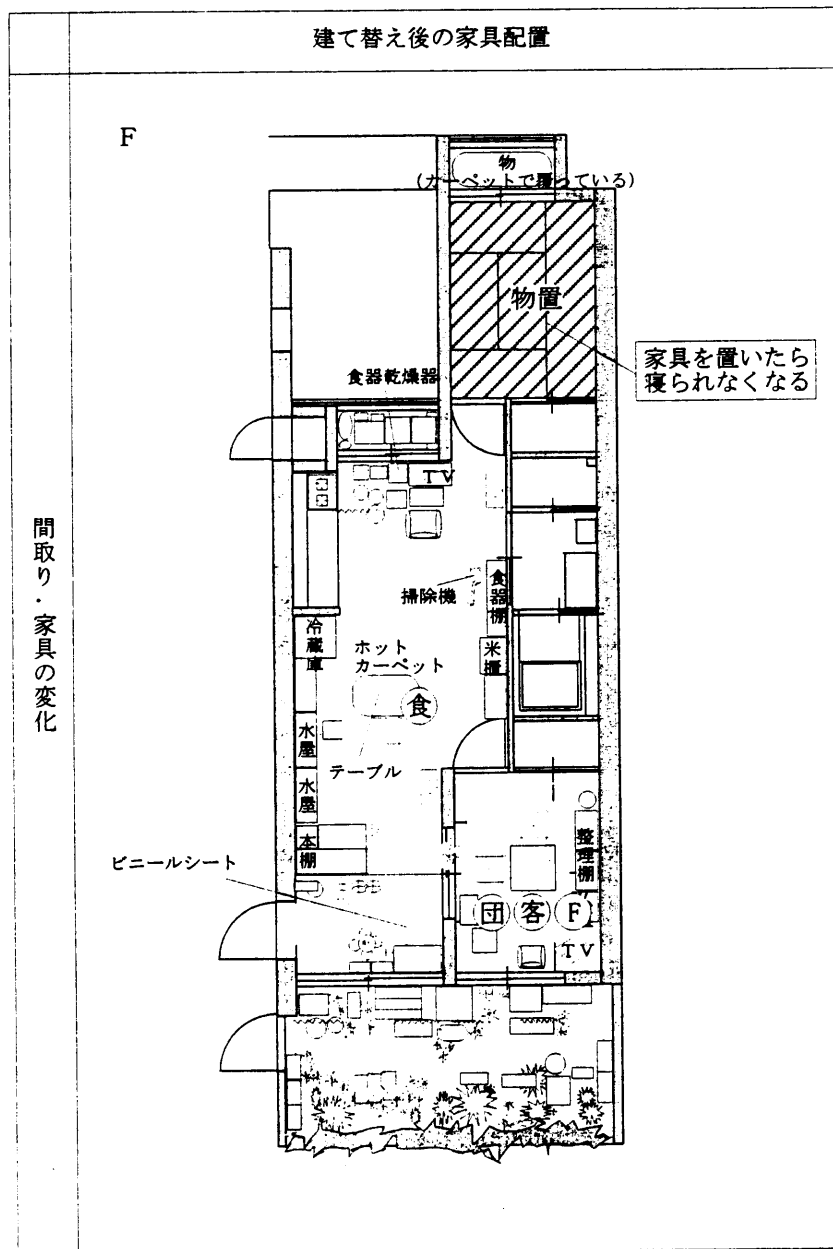


図3-9 問題の持続 〈R-2-112〉
「居室の狭小性」

との二世帯同居が始まった事例では「息子夫婦は両親が日当たりが良くて広い南6畳を使えるように、北4.5畳を我慢して自分達の寝室にしている。(0-1-202)」という問題を生じ(図3-8)、住戸面積にゆとりのある単身者世帯でも「家具を置いたら、寝られなくなる。タンス置き場が欲しい(R-2-112)」という居室面積の不足が指摘されている(図3-9)。

これに対して、N団地では同様の核家族の場合〈Tb〉には、子供の個室を確保しつつもその面積を抑制することで同時に家族共用の場や夫婦専用スペースも潤沢に確保されている(図3-7)。また、三世代居住の〈Kt〉では、逆に家族共用の場の面積を抑制することで子供夫婦の場として2室が確保されている(図3-8)。

(3) 生活価値の退行・継承・発展と問題の発生

従前住戸において、住み手はその狭小性や老朽性に起因する様々な問題を抱えながらも、その一方で住みこなしの過程では、住み手が尊重している固有の住まい方や住意識が醸成されている。それを生活価値と呼ぶならば、建替後も従前の生活価値を継承することで、固有のライフスタイルや思い入れのある暮らし方が可能となり、新たな環境の中で生活を組み立てる際の基軸を成すものと考えられる。

一方、建替後の新たな環境自体も一定の住まい方を想定・誘導するような計画(これを計画価値と呼ぶ)がなされているために、生活価値との間には順応・拮抗・発展などの様々な関係が生まれてくる。ここでは、住み手がどのような生活価値を継承しようとするのか、さらに新たな計画価値との相互作用によって、生活価値がどのように変容したのかを明らかにする(図3-3-1~8, 図3-10)。

イ) 我が家らしさ・住宅に対する愛着

我が家らしさや我が家に対する愛着も住み手が能動的に生活を組み立てるうえでの生活価値である。従前は「借家でも戸建てで長い年月がたち、増改築もしていたので我が家という気がしていた(0-1-202)」に代表されるように、増改築による住戸と生活の馴染みや身体化、手を加えることによって生まれる住戸に対する愛着などを背景にして我が家意識は高かった。これに対して、建替に伴う我が家意識の変容についてのアンケート調査の結果をみると(図3-11)、O団地は入居後10年弱経過しているという優位性もあるが、各団地ともに変わらないか強くなったものが全体の8割以上を占めている。特にN団地では、従前に比べて我が家意識が「非常に強くなった」ものが37.5%と最も高くなっている。「自分のためにとつくってもらったという気持ち強い。もし退去するかしないかの選択を迫られたら、ものすごく悩むだろう〈Md〉」や「うちの家が見たかったらどうぞと言う〈Tb〉」

建替前	建替後
生活の価値	生活価値の退行・継承・発展
<p><我が家らしさ・住宅に対する愛着></p> <ul style="list-style-type: none"> ○我が家意識・肯定的意識 <ul style="list-style-type: none"> ・増改築による生活の利便性や愛着を感じる ・借家でも戸建てで長い年月がたち、増改築もしたので我が家という気がした。 ・愛着があったので、退去する前には「ここで育ったんだから」と写真を撮った。 ・自分で手を加えたから我が家意識がある。(Rb) ○否定的意識 <ul style="list-style-type: none"> ・増築は生活に迫られてしていただけで、やはり借家という意識だった。 ・自分で増築した所への愛着もなかった。(Rb) 	<p><我が家らしさ・住宅に対する愛着></p> <ul style="list-style-type: none"> ○我が家意識・肯定的意識 <ul style="list-style-type: none"> ・前も今も我が家という気持ちがある。 ・我が家でもあり、借家でもあるという意識。 ○否定的意識 <ul style="list-style-type: none"> ・我が家らしさはない。 ・入居して10年近くなるが今でも何となく馴染まないし落ち着かない。 ・出ても住むところもないので、とりあえず我が家だと思っている。 ・いざというときに融通が利かないのでやはり借家である。 ・今は(我が家意識が)あまりない。寂しくなった。(Rb)
<p><起居様式></p> <ul style="list-style-type: none"> ○床座の生活 <ul style="list-style-type: none"> ・従前は床座で食事をしていた。 ・床座で、食事、団らんしていた。 ○椅子座で食事 <ul style="list-style-type: none"> ・台所を増築し、テーブルと椅子で食事をしていた。(Rb) 	<p><起居様式></p> <ul style="list-style-type: none"> ○洋間での床座 <ul style="list-style-type: none"> ・洋室にカーペットを敷いて座卓で食事している。別に和室があるので、量が良かったとは思わない。 ・洋間に床座はおかしいとは思うが、前から座り慣れているので炬燵を置いた。 ○椅子座の継承 <ul style="list-style-type: none"> ・現在もテーブルと椅子で食事をしている。(Rb)
<p>『空間と生活価値との拮抗』</p>	
	<p><DKの食事以外の利用></p> <ul style="list-style-type: none"> ・DKは妻が台所として使っている。 ・DKでは足が冷たいので床座が難しく洋間に座卓を置いて食事をしている。
	<p><購入した家具の未使用></p> <ul style="list-style-type: none"> ・DKのテーブルは食事をするために買って、しばらく使っていたが、現在はものを乗せるために使っている。 ・入居当初、洋間にソファのセット置いたが邪魔になるので片づけた。
	<p><椅子座(テーブル使用)の強要></p> <ul style="list-style-type: none"> ・南6畳を安定した夫婦専用の寝室にしたいので、DKにテーブルを置いて食事をしていく。 ・DKに座卓は不似合いだし床が汚れていそうな気がするので置けない。 ・医者に椅子座がよいと勧められてDKにテーブルを置こうと思ったが、狭いので、結局洋間に座って食べている。 ・現代風でやむを得ないかもしれないが、日本人なんだからこういう板張りは良くない。量だったらどんなに良かったか。(Rb)
<p><開放的な暮らし></p> <ul style="list-style-type: none"> ・どこもいつも開けっ放し。 ・田舎育ちのせい部屋を閉め切るのは嫌。 ・出入りがあるので、居間と娘の部屋の間の襖はいつも開けっ放しにしていた。 	<p><開放的な暮らし></p> <ul style="list-style-type: none"> ・どこもいつも開けっ放し。前の住宅からそうしている。 ・夏は、建具はすべて開けっ放しにしている。 ・クーラーを使用するとき以外は開けっ放しにしている。開けている方が開放的で広く使える。
<p><子供部屋の開放性></p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供部屋の障子は勉強以外は開けっ放しにしていた。 	<p><閉鎖化></p> <ul style="list-style-type: none"> ○入り口 <ul style="list-style-type: none"> ・親は入り口が狭くなって「穴蔵みたいなのに入出入りするの嫌だ」と言った。 ○個室 <ul style="list-style-type: none"> ・食後子供達は、姉の部屋でTVを見ている。 ・子供は、絶対に部屋を開けない。 ○続き間の喪失 <ul style="list-style-type: none"> ・大勢の来客時に困るので続き間があるのが理想。引っ越しのお祝いの時に不便だった。 ・洋間で二度ほど大勢の接客をしたが窮屈だったので、以降は外の店を利用している。
	<p><だんらんの喪失></p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きく変わったのは、団らんをしなくなったこと。従前はTVも1台しかなかったので1部屋に集まっていたが、居間は食後は子供達の部屋に入ったきり、襖も閉めてしまう。 ・好きな番組が違うので別の部屋でTVを見ている。
<p><接客の格式性></p> <ul style="list-style-type: none"> ・玄関から近いので4.5畳を接客の場にしていった。 	<p><接客の格式性></p> <ul style="list-style-type: none"> ・当初は、北和室を玄関からそのままいけるので客間兼書斎にするつもりで家具を置いた。
	<p><物置の喪失></p> <ul style="list-style-type: none"> ・物置が欲しい。現在はバルコニーを物置代わりに使っている。 ・ものを置く場所は少ないけど仕方がないと思っていた。

※各項目中(Rb)の表記のないものは全て0bのコメントである。

図3-10 生活価値の変化(0b・Rj)

など、計画プロセスにおける住み手参加によって、個別に計画された住戸や多様な要望を反映して計画された外部空間など、自らのための集住環境を自律的に創造しえたという達成感が、我が家意識に作用している。

そうした我が家意識の高揚によって、住宅に対する生活の馴染みの良さ、さらに生活を主体的・自律的に組み立てようとする意欲が高まる。と同時に、住戸に対して愛着のある維持管理が期待できる。

逆に、「入居して10年近くになるが、今でも何となく馴染まないし、落ち着かない(0-1-202)」や「寂しくなった(R-3-203)」などO・R団地では我が家意識が低下することで生じる問題も指摘されている。

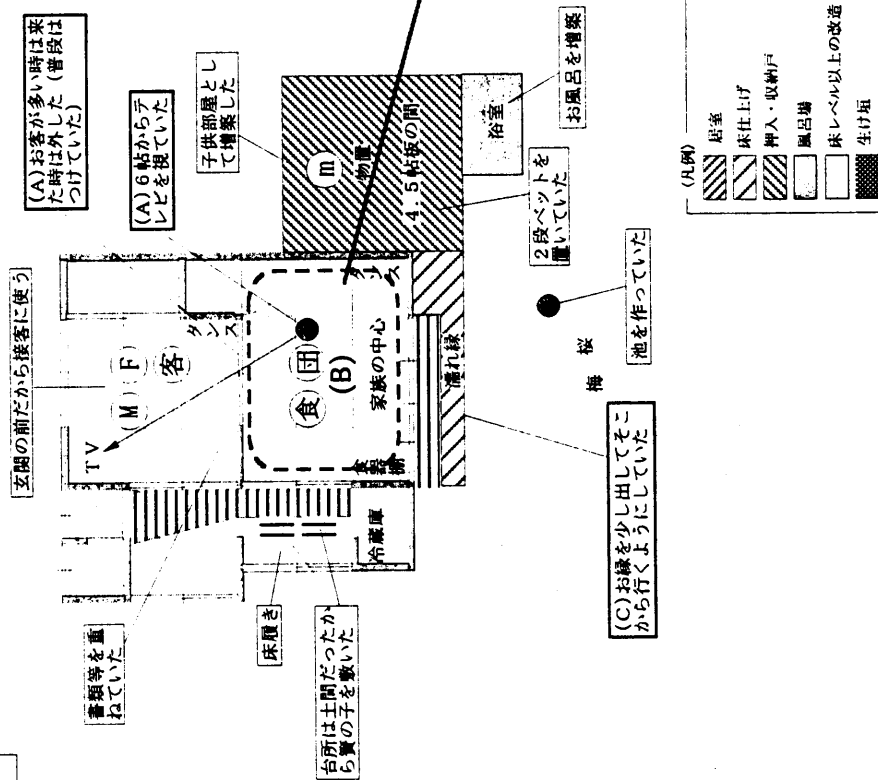
ロ) 開放的な暮らし

各団地ともに従前は、居室間を建具で仕切った開放的な間取りが計画されていた。各部屋の安定性は低いものの、「開け放てば広く使えるので使い勝手のいい間取り〈Tb〉」など住み手は開放的な間取りを活用して、広さ感の享受・多人数の接客や就寝への対応など住戸の狭小性の補完、親密な親子関係の形成など人や行為の緊密化・重層化、南北居室での通風・日照等の環境条件の均質化など、狭小住戸の制約を逆手に取った多様な住まい方の工夫が見られた。狭小住戸を住みこなすという住み手にとってはネガティブな状況を背景にしているものの、「間仕切は普段開けていて親子の関係はオープン。子供の部屋はつくらない〈Mr〉」など、開放的な暮らしは、生活に固有の価値と位置づけられるほどに高まっていた。

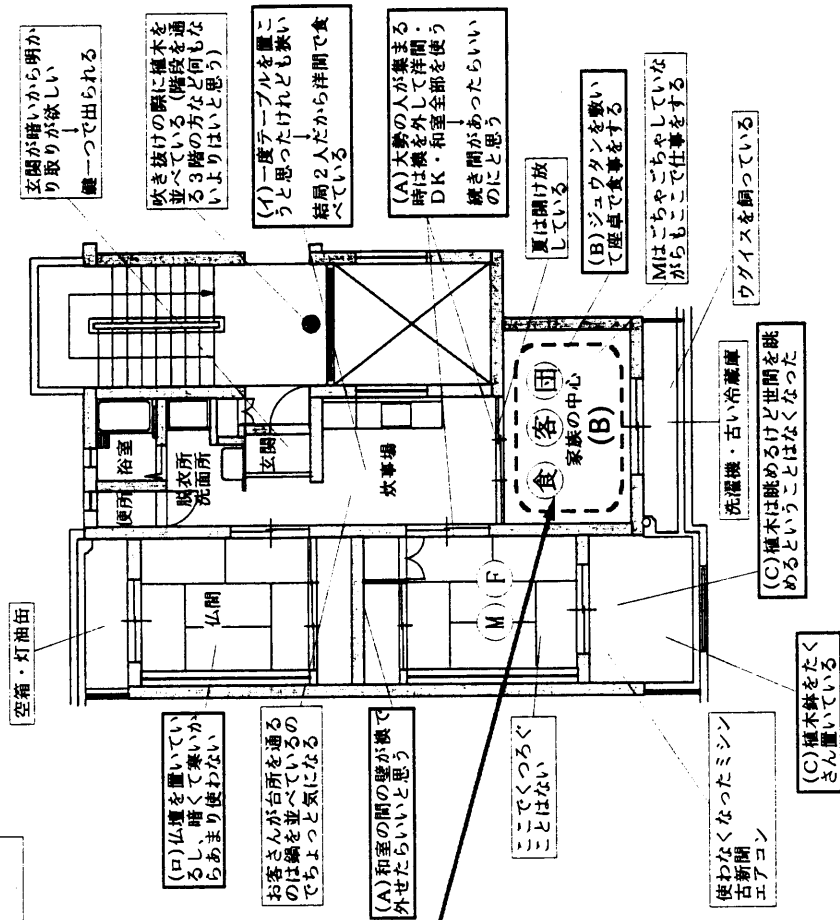
建替後O・R団地では続き間などの開放的な間取りが計画されていないことに対して、住み手は「どこもいつも開けっ放し(0-5-101)」など、開放的な暮らしを継承するために工夫をして空間の規定性に対抗しているが、「親は入り口が狭くなって『穴蔵みたいなどころに出入りするの嫌だ』と言った(0-1-202)」など、居室の分離・閉鎖化に対する抵抗感が窺われる。それは居室のフレキシブルな利用を阻害し、余剰室の発生の一因となり、多人数の接客に対する不満、広さ感の喪失と圧迫感の増大などの問題を引き起こしている。そのために、続き間がないことに対する不満も顕在化している(図3-12)。

N団地では、計画段階において住み手・計画者が、従前の生活をそのままコンテキストとして参照するという建替計画の優位性を利用して、開放的な暮らしという生活価値を継承するような間取りが計画されている。その結果「部屋を広く使うことで多目的に活用できる〈Im〉」「子供空間は自由空間〈Tb〉」「仕切っていないからみんな気軽に入ってくる〈Kt〉」「私は広い方が好き〈Ii〉」など、従前の住まい方や生活行為・人の接続性

建替後の住まい方



(A) 6畳と4.5畳の一体的な使われ方 (続き間接利用)
(B) 床座での団らん・食事
(C) 外とのオープンな関係



▶(A)居室の独立・閉鎖化
 ▶(B)洋室での床座
 ▶(C)近戸廻り空間への働きかけ・活用

図3-12 開放的生活から居室の独立・閉鎖化 (O-N t 邸)

や一体性が継承されている。と同時に、個々の住み手の個性や状況に応じたフレキシブルな住まい方を可能にしている。

さらに、完結的な個室が確保されたことにより、家族間の関係は、従前の「子供部屋の障子は勉強以外は開けっ放しにしていた(0-1-301)」や「子供は勉強しながら母親と話をする。親子の親密な関係があってよい〈Tt〉」など、開放的な生活や親子の親密な関係が評価されていたのが、「子供は絶対に部屋を開けない(0-1-301)」や「子供に声を掛ける機会が減った〈Tt〉」というように、親子関係が疎になったことが指摘されている。

特にO団地の事例では、子供が個室に籠もることで「大きく変わったのは団らんをしなくなったこと(0-1-301)」というように、団らん自体のありようにも変化をもたらしている(図3-5)。

従前が狭小住戸で居室が相互に接続する開放的な間取りであったが故に、そこでは多様な人や生活行為が相互に重層・融合するなどの濃密な関係性が生み出され、それが生活価値になっていたことは、近年のプライバシー重視の風潮に照らし合わせてみれば、極めて特徴的である。しかしながら、そうした特性を踏まえずに居室の安定性を重視するあまり、一義的に独立性の高い居室構成がなされたことが新たな問題の発生につながっている。

一方、N団地では〈Tt〉での問題はあるものの、親子の関係については概してうまく継承されている。〈Tb〉では、従前の「食事が終わった後同室のテーブルで勉強する。子供との関係は近い」という生活価値が住み手によって自覚され、計画段階で「子供は自分の部屋が欲しいというが、この関係だけは残したい」という住み手の明確な価値意識が提示されている。それを継承するために南側個室とLD空間との間の建具を透明ガラス入りにして両者を開放的に連続させることで、個室の確保と親子の親密な関係という「分離と融合」の課題が、二律背反としてではなく両義性のある計画としてなめらかに調停されている。その結果、建替後「(この家の計画の主眼は)子供のための間取りだから、実際良くなったのは子供部屋を1つずつつくってあげたこと」という評価がみられる(図3-3-2)。また、〈Md〉では従前住戸における二人の子供の共用の場の魅力が見い出され、そのまま継承するようなオープンなコモンスペースを提案することで、従前の良好な親子や子供同士の関係が継承されている(図3-3-5)。

ハ) 床座

食事・だんらんの際の起居様式は各団地とも従前は殆どが床座である。伝統的な住様式を基盤にしつつも、特に居室がすべて和室であること、狭小住戸において多様な生活行為が重合するようなフレキシブルな住まい方をするには家具(テーブル・ソファ)を極力

置かないこと、あるいは家具を置くだけの居室面積のゆとりがないことなどが床座を促進していたと考えられる。そうした床座志向の強さは、「洋間だが団らんはやはり炬燵が落ち着く(0-1-202)」など、建替後も特に団らんやくつろぎの場面において継承されている。

その反面、強い床座志向という住み手の生活価値と空間による起居様式の規定性(DK・洋室での椅子座)との間の拮抗した関係も指摘できる。

参加型計画のN団地では、L・D・Kの構成方法は、すべて住み手の住要求を正確に反映したものになっている(DK:2事例、K独立または対面式+L・D・茶の間:6事例)のに対して、計画者主導のO・R団地では、一義的にDK・LDK方式で計画されている。この違いは起居様式に関する価値の継承に強く影響し、さらには食事や団らんの場所の選択やその重なり方を決定する要因となっている。

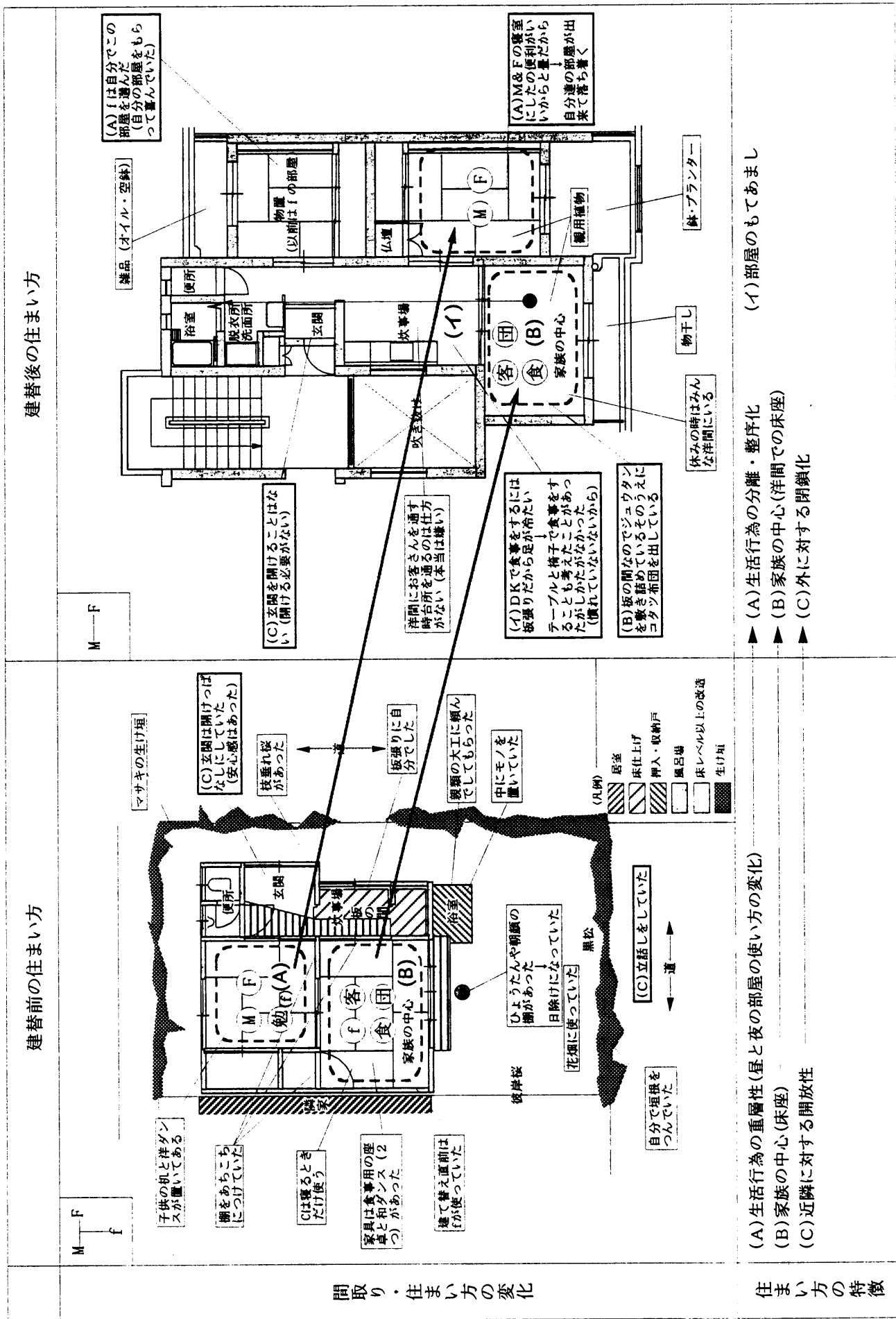
一つには、DKが専用台所化し、食事の場として使われないことである。O団地ではDKが、面積・流しなどのしつらえ・ホール化による動線上の問題などから起居様式を椅子座に規定する傾向が強く、「DKに座卓は不似合いだし、床が汚れていそうな気がするので置けない(0-1-301)」というように床座を受容し難い特性が窺われる。そのために食事も床座志向の強い世帯の場合には「洋室にカーペットを敷いて座卓で食事している。炬燵を置くが板の間でも不便は感じない。(0-5-202)」など、DKが食事の場にならずに、単なる炊事の間として「巨大な台所」となる事例が、33.3%(4/12)を占めている(図3-13)。また、R団地では、床座志向からLDKでの食事が回避され、就寝の間としての和室で食事が行われることで、新たな食寝一致の事例も見られる。

加えてその事例には、「入居当初テーブルで食事をしようと思って買ったが、やっぱり座った方が落ち着く。(R-2-213)」というようにDK空間に誘導されて一旦は購入したテーブルを放棄し、床座に回帰するような試行錯誤を行う住まい方の混乱した状況窺われる。

逆に二つ目には、床座を志向しつつも、「DKの造りがテーブル用になっているので座って食べるわけにも行かない(0-1-202)」というように、〈DK空間=椅子+テーブル〉の規定性に従属している住まい方や、「南6畳を安定した夫婦専用の寝室にしたいので、DKにテーブルを置いて食事をしている。(0-1-301)」など各部屋が個室・就寝室として使われるために、不本意ながらDKで椅子座の食事をせざるを得ない状況が見られる。

一方、N団地ではこうした空間の規定性と住み手の価値との間の拮抗した関係も見られるが〈Mr〉、両者が相互に順応した関係が顕著である。

Kが独立や対面式の世帯では、独立したLD空間が計画されることで起居様式に関する空間の規定性が弱く、「テーブルを持っていたのでしばらく食事をしたが、やはり、日本人は座った方がよい〈Im〉」など、従前の起居様式や茶の間としての使い方を継承、ある



いは転換することが比較的自由に行われたり（図3-3-1），「リビングが板間だったがテーブルで食事をしようとは絶対思わない〈Tb〉」といった床座での食事が受容されるなど（図3-3-2），住み手が自律的に起居様式を選択することが可能になっている。

二）N団地における新たな問題の発生

N団地においては、上述の内容については殆ど見られず、4世帯（Kt・Md・Ii・Un）では建替後の問題は皆無であった。問題の性格も従前の生活価値の継承が困難なことに起因するO・R団地の事例とは異なっている。

一つには「計画当初は南和室が板の間だったのを畳にかえてもらった。やはり板の間にしておけばよかった〈Mr〉」や「台所は対面式よりやはりDKがよかった〈Tt〉」など、主に計画段階で合意された間取りに基づいて住み手が想定した生活・空間イメージと実際の生活・空間との相違によって生じる問題がある。特に、「やはり使ってみないと知恵が出ない〈Mr〉」というように計画段階での確な空間と生活との対応関係の理解や住イメージの形成がなされていなかったことへの問題が指摘されている。

二つ目には、「子供はお互いに着替えるときには覗かれたくない」のに子供部屋の間の建具が「ガラス戸だったので駄目だと思った〈Tb〉」や「洗面所や台所には建具がつくとばかり思っていた〈Mr〉」など、住み手による計画の見落としや設計者の独断による計画と住み手の考えとの相違に起因した問題である。計画に対する合意が省かれた場合には、「建替後他の人の家を見て自分が気づかないことがあるのが分かった〈Tt〉」という住み手の計画案の理解力や評価力の限界が指摘されている。

こうした問題は、従前の生活価値が計画によって変容したことでなく、寧ろ計画づくりに対する住み手参加の方法的制約に起因している。計画の限りなく細部に至るまで住み手の理解・合意を求めることの限界性、空間と生活との対応関係に対する住み手の理解を深めるための住環境学習や計画案の提示方法の必要性、そのシミュレーターとしての設計者の役割の重要性、住み手の住要求をより多様に引き出せるようなプロセスの仕組み等の再検討を示唆している。

と同時に、問題発生を「自分で考えた間取りだから、仕方がない」というように、住み手自らが請け負っていることに特徴がある。さらにそうした問題を不満のままに留めたり諦観するのではなく、寧ろ「道具を整理して座敷にしよう〈Im〉」など、問題克服に向かう能動的な意識としての「ネガティブ ケイバビリティ (Negative Capability)」を獲得している。

ホ) N団地における生活価値変容の特性

O・R団地では従前の生活価値が、計画価値と対立することで大幅に退行している。N団地では、以下に抽出した従前と現在の各世帯の中心的な生活価値に関するキーワードの持続と変容からも、〈Un〉（家族構成の大幅な変化）を除いて、従前の生活価値が空間計画に投影されて継承・発展している状況が窺われる（図3-3-1～8）。

世帯	従前	現在
〈Im〉	「生活行為の集約性とハレ・ケ」	→「ワンルームと一部に座敷」
〈Tb〉	「生活の開放性(親子関係)」	→「生活の開放性と子供の間」
〈Md〉	「生活の開放性(親子関係)」	→「生活の開放性と子供の間、DK」
〈Mr〉	「生活基盤(稽古)と親子関係」	→「生活基盤(稽古)」
〈Kt〉	「生活の開放性(親子関係)」	→「三世帯居住と生活の開放性」
〈Tt〉	「生活の開放性(親子関係)と夫の趣味」	→「続き間の生活と夫の趣味」
〈Un〉	「台所」	→「モダンリビング」
〈Ii〉	「生活の開放性とハレ・ケ」	→「生活の開放性と格式性」

こうした生活価値とそれを反映した空間計画との関係において、価値継承の特性は以下の通りである。

①『価値の複合化・多元化』

「生活の開放性」という価値を継承しつつ、「子供の間」や「三世帯居住」などの従前問題の改善や新たな生活価値とを複合的に取り込むなど、従前の価値が多元化している（図3-3-2〈Tb〉，3-3-4〈Kt〉，3-3-5〈Md〉）。

②『価値の調停』

そうした価値の多元化の背景には、多様な生活価値、時には相反するような生活価値（例えば個室の確保と親子関係の継承）を択一的に継承するのではなく、寧ろそれらの両義性を保つような価値の相互調停・協調を経て継承されている（図3-3-2〈Tb〉）。

③『価値のコンテクスト』

「生活の開放性」や「集約性」などの生活価値が包含する人・行為・空間相互の関係性を断片化した部分として継承するのではなく、それぞれの関係性を丸ごと保持することで生活価値を体系的なコンテクストとして継承している。（図3-3-1〈Im〉，3-3-5〈Md〉）

④『価値の拡大・増殖』

生活基盤としての「稽古」や「夫の趣味」など、断片的な生活価値が継承される場合にも

それらが多様な生活価値同士の調停により、専用の場が確保され、積極的なしつらえや使われ方がなされるといった計画と使い方の相乗作用により、「稽古」のイメージ向上やその場に対する愛着の高揚につながるなど、生活価値が拡大・増殖している。（図3-3-3〈Mr〉，3-3-6〈Tt〉）

⑤『価値の多様性』

個々の住み手に固有であるが故に多様な生活価値が、個別の計画によって、多様なままに継承されていることである。

⑥『価値実現の意志の喚起』

こうした価値の継承によって、特に価値が投影された空間の使われ方に住み手の強い意志（こだわり）が見られることである。例えば、生活の開放性やフレキシビリティを活かすために、板の間であっても床座に徹する〈Tb〉や、6畳二間の広々とした続き間を稽古専用の場とし、就寝・食事・団らんを一室にまとめる〈Mr〉などである。

へ）小括

各団地ともに、建替に伴う環境移行に対して、住み手は従前の生活の組立を再構成することで新しい環境に順応しようとするだけでなく、生活の開放性・起居様式・生活の場の適正規模などの従前の生活価値を継承しようとする意欲を有している。

しかしながら、O・R団地では従前の生活価値の継承・発展が難しく、寧ろ移行後の計画価値との「対立」によって生活価値が「退行」するために、従前には見られなかったような新たな問題が発生している。その要因は、従前の生活・環境の全体を改善すべき対象としてネガティブに捉え、従前の生活価値やそれを支持していた環境構造の解釈が行われないままに計画が進められ、環境が代替化（alternation）されたことである。いま一つの問題は、住み手には時として相反するような多様な生活価値があるにもかかわらず、それを画一化すること、あるいは一義的な強い規定性をもって計画することの限界性である。

これに対してN団地では、多様な住み手の生活価値が変容・発展しながら継承されている。それを可能としているのは「居住者の特定」が可能であるという計画上の優位性を活用した住み手参加の計画が「創発的」に行われたことである。その特性は、従前の生活価値や問題を断片化されたデータとしてではなくコンテキストとして参照しつつ、個別設計によって個々のコンテキストの体系性を保持したままで新たな価値を重層化することで、環境が連続的に変容（modify）したことにある。併せて、価値生成の基盤の一つである従前住宅の空間的特性としての開放性を継承し、空間の規定性を緩和（「弱い計画性」）していることである。

(4) 新たな生活価値の触発

環境移行は、新たな空間が生起する価値（計画価値）によって、住み手が従前にはもち得なかった、あるいは意識しなかった新たな生活価値が触発されたり、あるいは潜在的な生活価値が顕在化する機会でもある。その反面、新たな空間価値に対してそれに対抗・拮抗するような生活が発生したり、極端な場合には何等新しい価値を生み出さない場合も見られる。

それらは空間の計画方法によっても異なることを前提にして、計画者主導の新たな計画によって新たな生活を誘導することに重点が置かれたO・R団地と、計画段階で住み手の住要求と計画者の理念とが相互浸透することで持続と変容を主眼とした空間が創発されているN団地とを比較しつつ、新たな空間がいかなる生活価値を触発しているのかあるいは、拮抗した関係を生み出しているのかを明らかにする。

イ) 空間への順応による価値の触発

新たな空間の価値を享受し、生活に新しい価値を見出す事例として、以下の場面が抽出される（図3-14）。

①起居様式：床座VS椅子座

O・R団地ではDKや洋室などが指示する起居様式に住み手が順応することで、新たな生活価値が触発されている。「従前は床座だったが、DKが板の間だったし使わないともったいないのでテーブルで食事をしている。(0-1-201)」というように、従前は床座の生活価値を有していたものの、椅子座を誘導する空間に影響されて、新たに椅子座を始め、結果的には「入居時にテーブルとソファを買ったが、洋室は椅子でくつろぐのに具合がいい。日中は大体そこにいる。(0-5-101)」や「テーブルは流しから近くて早く片付くし、こぼしても掃除が楽なので結構便利で、椅子座に変わっても違和感はない。(0-2-203)」など、その合理性や快適性などの新たな価値を発見している。あるいは、「テーブルやソファが好きで前から置きたかった(0-5-101)」という潜在的な生活価値が新たな空間に触発されて発現することもある。

N団地では、空間そのものが住み手の生活価値を投影したものになっているために、O・R団地のように新たな空間が住み手を触発して新たな起居様式の価値が認知される事例は見られない。寧ろ、従前にはなかった板の間のLD空間に対しても「リビングが板の間だがテーブルは絶対に置かない。座卓はどこにでも置ける〈Tb〉」というように、板間＝椅子座という安易に空間に順応するのではなく、固有の生活価値を実現・増殖することに向けての住み手の自律的な意志が窺われる。

建替前		建替後	
従前の状況		新たな生活価値の触発・潜在的な価値の顕在化	
0b	<p><空間のゆとりのなさ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・主人は、座卓でワープロを打ち、書類なども重ねてそのまま置いていた。(5-202) ・書斎をとるだけの面積的なゆとりはなかったので、ワープロなども6畳の隅で打っていた。来客時には、プレハブが空いていたので、そこで話をしていた。(1-204) 	<p><起居様式：床座VS椅子座></p> <p><椅子座の合理性や快適性の発見></p> <ul style="list-style-type: none"> ・従前はテーブルを置こうなどと思っていなかったが、テーブルの方が動くのに楽。(1-201) ・食事中に立ったりするのはテーブルが便利。(1-202) <p><空間からの誘導></p> <ul style="list-style-type: none"> ・従前は床座だったが、DKが板の間で使わないともったいないのでテーブルで食事をしている。(1-201) ・DKは板間なのでテーブルで食事をするのもいいといって、入居後に購入した。(1-205) <p><潜在的な価値の顕現></p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーブルやソファが好きで前から置きたかった(5-101) 	
		<p><場の獲得></p> <ul style="list-style-type: none"> ・洋間の一角を書斎コーナーにして、机を置き書類も整理している。(5-202) ・自分一人で専用できる部屋が初めてできた。(1-204) <p>[夫婦別寝]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・北和室は入居時空き室で、息子が転入して個室に。その後息子が転出したので妻の個室になった。夫は寝るのが早いしお互いびきをかく、また南和室は車の音がうるさいので別寝になった。(1-305) ・入居当初は南和室が夫婦寝室、北和室は客間にしていた。居心地が悪いので夫は洋間を就寝の場にした。娘がお産で帰って来て、洋間は妻と孫の就寝の場になり、夫は来た和室に追い出された。そのうちに北和室が居心地が良いのでそのままになった。テレビ・ファミコンがあるので夫はそこで寝るようになった。(0-1-204) 	

図 3-1 4 新たな生活価値・触発

②新たな場の獲得

建替を契機として、従前には見られなかった新たな使われ方をする場が獲得されている。O団地では、従前「主人は、座卓でワープロを打っていた。書類なども重ねてそのまま置いていた」のが「洋間の一角を書斎コーナーにして、机を置き書類も整理している。新しくなってこういう風に使えるようになった(0-5-202)」など、洋室の一角(0-5-202)や北和室(0-1-204)に従前はなかった夫の書斎がとられている。

また、居室数の増加を活用することによって発生した「夫婦別寝」も、従前は全く意識されなかったにもかかわらず夫婦がそれぞれ専用の部屋を有するという点では新たな場の確保の一形態である。「北和室は入居当時空き室で、息子が転入して個室に、その後息子が転出したので妻の個室になった。夫は寝るのが早いし、お互いにいびきをかく、また南和室は車の音がうるさいので別寝になった(0-1-305)」や「入居当初は南和室が夫婦寝室、北和室は客間にしていた。居心地が悪いので夫は洋間を就寝の場にした。娘がお産で帰ってきて、洋間は妻と孫の就寝の場になって夫は北和室に追い出された。そのうちに北和室が居心地がいいのでそのままになった。TV・ファミコンがあるので夫はそこに寝るようになった(0-1-204)」など、家族構成などの変化に対応するように生活を空間に順応させていく過程で、その価値が試行錯誤的・偶発的に発見され、新たな場が獲得されたものである。

一方、N団地では、新たに獲得された場の典型として、仕事用の物置< Tb >・三世代同居< Kt >・フォーマルな続き間座敷< Ii >があげられる。これらの場所は、O・R団地とは異なり、住み手が計画段階で要望し実現されたもので、住み手が主体的に場を獲得していると言える。

O・R団地の場合には、「家に住まい方を合わせていかないと借家には住めない。勝手ばかり言ったら自分の理想通りに家を建てないといけない。(0-1-201)」など、新たな空間が他律的に供給されたが故に、それに対して自らの生活を馴染ませること、即ち空間に生活を順応させることが行われている。そこには住み手が主体的に生活価値を獲得していくというより、寧ろ試行錯誤を続けながら空間に順応することを通して、偶発的に新たな生活価値が認識されている状況が窺われる。

ロ) 拮抗的關係 (O・R団地の特性)

O・R団地では新たな空間によっても生活が触発されない、両者の間に拮抗状態が生まれる場合がある。その典型的な場面を余剰室に対する住み手の対応に見ることができる(図3-15)。

①余剰室とゆとりの空間

これまでの集合住宅計画においても、家族型の違いに応じて多様な面積系列の住戸を用意する型別供給の有効性が示されていたが、O団地では従前居住者に単身者から核家族までの多様な家族型が混住していたにも拘わらず、1・2種の面積差だけでそれぞれ画一的な住戸面積と居室数の住戸が供給されている。R団地では比較的多様な面積系列が用意されている。一方、N団地では、住戸面積を多様化することも住み手に提案されたが、各自の明確な生活イメージが計画段階で提示された結果、単身者でも広い住戸を希望したため、住み手の合意のもとに同じ住戸面積が提供されている。ただし、居室数は3室～5室まで多様なものとなっている。

団地毎の計画の違いが、部屋の使われ方や住み手の評価に影響を与えている。

O・R団地では、特に単身者や夫婦のみなどの少人数世帯で従前の居室面積や居室数で不都合がなかったのに、建替後それが増加したことによって、余剰室が発生している。これに対して、「北和室は夏涼しいので違うTV番組を見たいときに藤の椅子に座ってみる。冬は寒いのであまり使わない。(0-2-203)」や前述の「夫婦別寝」の場になるなど、居場所の選択性や安定性を高めるといふ、余剰の問題を逆手に取った空間への順応も見られる。反面、単身者で「一部屋完全に空いている。(R-3-203)」や、従前は二人でも「狭くはなかった。」のに、現在は一人なので、「北の六畳は普段あまり使わないで掃除だけしている。(0-5-101)」など、余剰室がデッドスペースあるいは物置化されている事例も見られる(図3-16)。加えて、「北4.5畳は娘の個室だったが結婚後は空き部屋になり物置になっている。(0-1-203)」といった家族人数の減少に伴い、使われない部屋が発生している場合もある(図3-17)。

そこでの問題は、余剰室が発生するような計画自体のあり方よりも、寧ろそれが発生したときに空間価値を積極的に活用して、生活の質を高めるのでもなく、あるいは自らの生活価値の実現に立ち向かうでもなく、生活の質的向上に向けて空間と生活との能動的な関係化を放棄し、最低レベルでの生活の順応を図るような消極性や諦観意識が形成されていることにある。

N団地では余剰室が発生している事例は単身世帯でも見られない。若年単身世帯の〈Un〉では、従前3畳の和室が食事・だんらん・接客など生活の中心の場になり、「せめて4.5畳あれば良かった」と言われていたのが、建替後L・D空間の分離拡大(12.5畳)と安定的な接客空間(6畳)の確立に面積的なゆとりが活用され、「今度はまじめに家で生活しようと思っている。今は家にいることが多い」というような住戸に対する愛着の高まりが見られる(図3-3-7)。高齢単身世帯の〈Ii〉では、一人暮らしでも計画当初より「広い方が好

き」と住み手の意志で標準面積の住戸が選択され、床の間・仏間付きのフォーマルな座敷、それと続き間になる開放的なリビングスペースなどに面積のゆとりを活用している（図3-16）。床の間飾りや接客用の座卓など、格式性を高めるための積極的なしつらえがなされ、その結果、従前は「古かったから友達を呼べなかった」のが「友達は今よく遊びに来る」ような変化や、建具を開け放つことで広々とした空間を積極的に享受している。

また、O団地の（0-1-203）と対比的なのが〈Im〉である（図3-17）。従前、多様な生活行為を重ね合わせて「一室完結」した住まい方に価値が置かれており、それを踏まえて、計画段階では就寝以外の行為をまとめて一室で展開する「ワンルーム」が希望された。結果的には多様な場への分節化と連続性・一体性を両立させる三室続き間の計画が行われた。これに対して時々帰省する娘のための就寝の場を確保する必要性が生じたときに、敢えて専用の個室化せずに、不在時には建具を開放しLDと連続させることでリビング空間を拡大するような使い方がなされている。「娘の部屋は個室ではないけど、何でも利用して良い部屋」というように「ワンルーム」の価値を継承することにこだわった住まい方が展開されている。

余剰室の発生に対して、O・R団地でそのまま放置される傾向にあるのとは対照的に、N団地では生活に積極的に取り込むように住まい方を工夫するといった、生活価値を高めるための住み手の意志と能動的な働きかけが窺われる。

両者の差には、住み手に対応した住戸面積の提供や続き間などの開放性の有無といった計画上の違いも作用している。加えて、N団地では、予め生活価値の投影された空間の計画により、住み手が計画価値を十二分に活かして住みこなすことは、自動的に生活価値を増殖し自己実現を図ることにつながるという回路が生成している。逆に言えば、空間を活用しないことは、自己否定につながる。そうした仕組み故に、住み手は空間活用に対する責任を負い、能動的になりうるのであり、生活を主体的に組み立てることが促進される。即ち、創発的方法は移行した構築環境を基盤として住み手が自律的に生活を組み立てようとする「住み手の意志」を触発する。

一方、O・R団地では、専門家が一方的に計画し他律的に供給された住戸故に、空間を活用しないことは、自己否定ではなく、計画否定に留まる。そのため、空間を活用することが新たな生活価値の発現に結びつかない場合には、そのまま放置され余剰室化するといえる。そこには住み手の「客体性」が窺われる。

